

**特集**

## 産業観光でまちを活性化

- 「寄稿1」産業観光の意義とその振興へ向けて……………16  
横浜商科大学商学部貿易・観光学科教授 ● 羽田耕治
- 「寄稿2」ものづくりのまち室蘭の観光資源を  
市民とともに探る……………19  
室蘭市長 ● 青山 剛
- 「寄稿3」躍動するあきしま  
「産業観光でまちを元気に」……………22  
昭島市長 ● 北川 穰一
- 「寄稿4」既存の観光と新たなにぎわいの創出……………25  
常滑市長 ● 片岡憲彦

■とっておき！ 美しい都市の景観……………3

「識名園」那覇市(沖縄県)

■食から考える カ・ラ・ダイきいきライフ(服部幸應 監修)……………4  
苦味ほんのり。体を目覚めさせる早春の味わい  
フキノトウの天ぷら

■市長座談会……………5  
シテイプロモーションで戦略的にまちを売り込む  
座談会出席市長 ● 吉田英男・三浦市長／山脇 実・豊川市長／  
久保田后子・宇部市長／安田公寛・天草市長  
司会・コーディネーター ● 細野助博・中央大学総合政策学部教授

**動き**

■世界の動き／2期目のオバマ政権の対中姿勢 時事総研客員研究員 ● 金重 紘……………28

■経済の動き／中小企業とリスク 東京大学大学院教授、総合研究開発機構理事長 ● 伊藤元重……………30

■自治の動き／中央集権に戻るつもりか ジャーナリスト ● 松本克夫……………32

■マイ・プライベート・タイム……………40  
農家生まれの農家育ちを生かし  
「メダカやトキの復活をまちづくりに生かす」  
小山市長 ● 大久保寿夫

■わが市を語る……………44  
◆「生涯を安心して過ごせる地域完結型市政」の  
実現を目指して 南魚沼市長 ● 井口 一郎

◆市民との協働の下、「人が輝く水と緑の交流都市」の  
実現を目指して 小美玉市長 ● 島田 穰一

◆「市民が主役 市民が輝く知多市」を目指して、  
市民との協働によるまちづくり 知多市長 ● 加藤 功

◆豊かな自然がはぐくむ食と  
おもてなしによるまちづくり 南九州市長 ● 霜出勲平

■歴史に見る リーダーと、それを支えた人たち……………52

■編集後記……………60  
昼前の人材に注目 ― 後藤新平(六) ― 作家 ● 童門冬二

■市政ギャラリー 都市の素顔……………61  
「大宮駅前」(埼玉県)

表紙イラスト：山本 陽  
本文イラスト：川名 京

## 市政ルポ……………34



城陽市(京都府)  
交通要衝化と市民力向上で  
発展飛躍する「近畿のへそのまち」  
城陽市長 ● 橋本昭男

- 都市のリスクマネジメント……………42  
コンプライアンス② コンプライアンスの環境整備について  
市町村アカデミー客員教授 ● 大塚康男
- 全国市長会の動き— Mayors' Action ……………54
- 〔東北復興応援企画〕美味しい!! 楽しい!! 美しい!! ……………60

# シティプロモーションで 戦略的にまちを売り込む



やすだ きみひろ  
**安田 公寛**  
あまくさ  
天草市長(熊本県)



くぼた きみこ  
**久保田 后子**  
うべ  
宇部市長(山口県)



やまわき みのる  
**山脇 実**  
とよかわ  
豊川市長(愛知県)



よしだ ひでお  
**吉田 英男**  
みaura  
三浦市長(神奈川県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ  
**細野 助博**

中央大学総合政策学部教授

まちの魅力である地域資源を  
地域内外へアピールし、まち自  
体を効果的に全国に売り込む「シ  
ティプロモーション」。人、モノ、  
お金、情報を呼び込んで地域を  
活性化し持続的に発展させるこ  
とができ、市民のまちへの愛着  
や誇りを高めることにもつなが  
ります。ポイントとなるのは、  
認知度や好感度向上に向けての  
戦略的な取り組みです。

座談会では、シティプロモ  
ーションを積極的に展開する吉田  
英男・三浦市長、山脇実・豊川  
市長、久保田后子・宇部市長、  
安田公寛・天草市長にお集まり  
いただき、取り組みの経緯や内  
容、その効果、市民や企業との  
連携の重要性などについてお話  
しいただきました。  
(本文中の役職名・敬称は一部省  
略しています)

まちの活力が沈滞する中で、「手をこまねいても仕方がない」と、市外にまちを売り込む専門部署が整備されました。



吉田 英男  
三浦市長(神奈川県)

地域の宝をいかに磨き効果的に市内外に売り込むか

細野 各都市には、その特性により違いはあろうとも、歴史や文化、産業など、さまざまな地域資源を有しています。これらの資源を、まちを売り込む要素としてどのように磨き、魅力を高められるか。そして、効果的にその情報を発信し、地域活性化に結び付けられるか。これは

の高校駅伝部やプロバスケットボールチームを市民とともに応援していますし、これまで築き上げてきた産業・都市基盤やアクセスの良さという強みを生かし、臨海部や内陸部への企業誘致も積極的に進めています。観光資源の掘り起こしとしては、日本三大稲荷の一つといわれる豊川稲荷をさらに知ってもらえるようにPRするのはもちろんのこと、あまり知られていない境内奥の霊狐塚をパワースポットとして紹介し、光を当てるといったことも取り組んでいます。

久保田 宇部市では市制施行90周年を迎えた平成23年以降、シティセールスのための専任組織の設置、専用フェイスブックの開設など、さまざまな取り組みを推進していますが、シティセールスの中で最も伝えたいものは、苦難を「市民力」により挑戦、克服してきた、「緑と花と彫刻」のまちづくりの歴史とその魅力です。

宇部市は、戦後の公害問題で苦しみました。衰退した石炭産業からセメント・化学工業へ転換を図ることができたものの、その代償として煤塵汚染が発生。これに市民が立ち上がり、昭和26年には、「産・官・学・民」からなる「宇部市ばいじん対策委員会」を設置し、独自の公害対策を進めました。「宇部方式」ともいわれるこの取り組みは国際的にも高い評価を受け、平成9年には国連環境計画の「グローバル500賞」を受賞しています。

現在、宇部市は「緑と花と彫刻のまち」をキャッチフレーズにしていますが、これも公害対策の中で生まれた「緑化運動・花いっぱい運動」や「まちを彫刻で飾る運動」など、市民とともに展開してきた各種運動の成果です。その運動は、今では50年以上の歴史を誇る「UBEビエ

今日の地域づくりにおいて、大きく問われていることだと思っています。

本日は、その試みに取り組む都市の市長にお集まりいただきました。いずれも、戦略性を持って、シティプロモーションに取り組み、まちのブランド力を向上させていらつしゃいます。それでは、シティプロモーションを実施するに至った経緯、そして、その事業概要についてお話しください。

吉田 三浦市は東京近郊にありながら、手つかずの自然、昭和の風情が色濃い町並みなど、魅力的な地域資源に恵まれた都市です。さらに、古くから漁業が盛んで、全国に13港しかない特定第3種漁港にも指定されているほか、ダイコンやキャベツをはじめ全国有数の露地野菜の産地としても知られています。

ところが、こうした貴重な資源を有しているにもかかわらず、交通アクセスの悪さや都市基盤整備の遅れもあり、平成6年をピークに人口は減少。これに伴い、地域経済も低迷し、市の財政力も著しく弱体化しています。

そうした中で、平成16年度、私の市長就任の直前に設置されたのが、「営業開発課」でした。まちの活力が沈滞する事態を前にして、「手をこまねいても仕方がない」と、市外にまちを売り込む専門部署を立ち上げ、戦略的にシティプロモーションに取り組む体制を整えたのです。それを成功させるのは人財です。私はそこやる気と能力にあふれた職員を配置しました。

当初から掲げているミッションは、対外的には新たな三浦ファンを獲得すること。そして、市民に対しては、わがまちを再認識して、三浦市はこんないいところだったんだと自慢や誇りに思ってもらうこと。この2つを旗印にさ

ンナレ(現代日本彫刻展)や「花壇コンクール」として引き継がれ、まちを代表する資源として定着しました。

市外の方々には、こうしたまちの再生の歴史をご理解いただいた上で、野外彫刻など独自の地域資源を楽しんでいただき、わが宇部市のサ

平成25年11月9日と10日に開催される「第8回ご当地グルメでまちおこしの祭典! B-1グランプリin豊川」では、市民と力を合わせて、精一杯おもてなしをさせていただきます。



山脇 実  
豊川市長(愛知県)

さまざまな主体と効果的に連携して、シティプロモーション活動を推進しています。

山脇 豊川市においても、昨年の8月、「豊川市シティセールス戦略プラン」を策定したのを機に、まちの魅力を地域内外へ効果的にアピールする、シティプロモーションに取り組んでいます。

その背景にあるのは人口減少や都市間競争による都市の活力減退への危機感でした。豊川市は平成18年以降、3度にわたり周辺の4町と合併しましたが、近年は全国の都市と同様に、人口の減少傾向が見られますし、今後、ますます激しくなる都市間競争の中で、個性や強みを打ち出すことができれば、経済活動の低下や、さらなる人口減少に陥ることが懸念されます。そこで、積極的にまちを売り込み、市内に人、モノ、金、情報を流入させることで、持続的な発展に結び付けようと考えました。



広報プロモーションの展開や効果的な情報発信はもちろんですが、本市では「文化・歴史」「スポーツ」「祭り・イベント」「環境・自然」「産業・都市基盤」をはじめとした地域資源をバランスよく底上げし、市全体の魅力を高めることに力を入れています。スポーツ振興に向けて、全国高等学校駅伝競走大会でも優勝している地元

ポーターとなっていたいただきたい。一方で、市民にも、こうしたまちの歩みを再認識し、「わがまちへの愛着心の向上」に結び付けていきたいと考えています。

安田 天草市は、平成18年3月に天草諸島内の2市8町が合併して誕生しました。以来、「日本の宝島「天草」の創造」を基本理念に、市内の各地域が有する地域資源(宝物)を生かし、いかに売り込むかという視点で、地域づくりを進めています。

その柱となっている事業の一つが地域ICTの活用です。市内の各施設を光ケーブルで接続するなど、情報基盤整備を進めるとともに、ポータルサイト「天草Webの駅」も平成20年に立ち上げ、イベントや宿泊、地域情報など、市民自らが発信しています。

また、平成23年11月には、天草の新鮮な農林水産物や加工品を首都圏に紹介するためのアンテナショップ「あまくさ宝島市場」を横浜市の中村区に開設しました。オープンから1年が過ぎましたが、お客さまや地元事業者への認知度も高まり、取り扱う商品も約500品目と充実。天草産の加工品の新たな販路としても機能し、地元への経済波及効果も高まっています。

加えて、総務省の「緑の分権改革推進事業」の採択を受け、今年から京都大学と連携して実施しているのが「天草宝島二地域就労促進事業」です。市や大学の支援の下、地域の企業と都市圏の企業の双方のメリットとなるプロジェクトを企画し、協定を締結した上で、事業を進めます。異業種からの農業参入をはじめ、既にいくつかのプロジェクトが動き出していますが、行政



安田 公寛  
天草市長(熊本県)

情報発信は市民の役割。  
地区振興会が「天草Webの駅」を活用して、自分たちの宝を市外へ積極的に伝えています。

のまちの歴史を再認識するようになり、より自発的に情報発信なども取り組まれるようになりました。今では、市内51の地区振興会それぞれが「天草Webの駅」を活用して、自らの地域の宝を市外へ積極的に伝えていきます。

こうした動きを受けて、現在、特に期待しているのは、地域発のコミュニティビジネスの活性化です。現在、二地域就労促進事業の一環として、市民を対象にした「天草宝島起業塾」も開

催していますが、塾生の中から一人でも多くの担い手が生まれてくれればと考えています。

世界遺産については、平成27年の本登録を目指し、機運が高まっていますが、将来的には世界にも目を向けて、市の魅力売り込んでいきたい。そのためにも、天草の歴史・文化への深い造詣を持つ人材はもとより、英語・フランス語・中国語・韓国語などで天草を語ることが出来る人材の育成にも取り組んでいきたいと思っています。

**山脇** 豊川市でも市民がシティプロモーションの担い手として積極的に活動しています。中でも活発なのが、平成21年に結成された「いなり寿司で豊川市を盛りあげ隊」の活動です。設立以来、「豊川市と言えはいなり寿司。いなり寿司と言えは豊川市」と認知されることを目的に、「豊川いなり寿司フェスタ」や「創作いなり寿司コンテスト」などのイベントを開催するなど、活動の輪を広げながらまちおこしを展開しています。

平成22年以降は、B-1グランプリ全国大会にも毎年参加しています。平成23年には、中学生を含む市民ボランティア600人以上の方に手伝いをお願いしたところ、「おもてなしが素晴らしいところ」との高評価をいただき、念願の「第8回ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1グランプリin豊川」の開催が決定しました。まさに、人、モノ、金、情報呼び込むことができ、地域の活性化が期待できます。開催される11月9日、10日は、市民と力を合わせて、精一杯おもてなしをさせていただきたいと考えています。

**吉田** 実は三浦市でも、市民団体の協力の下、まぐろを使用したご当地ラーメン「三崎まぐろラーメン」を売り出しています。豊川市と同様、毎年

本市のウリは、「市民力」により  
挑戦、創りあげてきた  
「緑と花と彫刻のまち」の  
歴史と魅力を持つ、  
海の幸・山の幸に恵まれた  
緑あふれる工業都市です。



久保田 后子  
宇部市長(山口県)

ん方です。おかみさんの協力の下、地域一体となった受け入れ態勢の整備、体験メニューの開発にも取り組んだ結果、平成22年度までは皆無だった教育旅行の受け入れが、平成24年度は14校、約1500人、さらに来年度は15校、約2000人と大幅に増加しています。

フィルムコミッション事業も、平成19年にNPO法人化した市民団体を中心となって業務を担っていますし、今年年間25万人が訪れる「三浦海岸桜まつり」も市民団体による自発的な動きから始

B-1グランプリ全国大会に参加しており、最高順位は第5回の5位。豊川市で行われるグランプリにももちろん参加予定です。

**久保田** やはり、多くの人にまちへ来ていただくには、地場産品の「おいしさ」など「食」という要素は欠かせませんね。宇部市においても特産品のPRはもちろん、地元的一次産品を使用した加工品を「うべ元氣ブランド」として認証し、市外へ積極的にアピールしています。今後は宇部市ならではの「食(グルメ)」のPRにも取り組むみたいと思っています。

**単独の自治体ではできないことも  
複数の自治体で連携すれば実現できる**

**細野** 市民や地域とのつながりの重要性についてご紹介いただきましたが、より大きな視点で見れば、民間企業をはじめとした産業界、さらには大学などの教育機関の役割も大きいのではないかと思います。シティプロモーションを展開する上での他領域の活動主体との連携の重要性についてもお話しください。

**吉田** 私もシティセールス・プロモーションを行う上で企業や大学も欠かせないパートナーだと認識しています。これまで三浦市においても、京浜急行電鉄さんやキリンビールさんと連携し

また取り組みです。そもそもこの桜は平成12年から10年間にわたってその市民団体が植え続けたものですからね。その意味では市民が一からつくりあげたイベントだといっているでしょう。

**久保田** 宇部市は「市民力」でまちを築き上げてきた歴史がありますから、多くの「人の輪」を生かしたシティプロモーションを展開することが重要だと考えています。そのための仕組みの一つが「宇部市シティセールスパートナー」制度です。ご登録いただいた人には、本市の魅力や出来事を、口コミやブログ、フェイスブック、ツイッター、新聞、雑誌などで情報発信し、PR活動を行っている方などを対象にしたファンクラブ「宇部倶楽部」も東京、九州、関西で設立しています。

それと併せて、地域の魅力を市民自らが発信・プログラム化して、参加者を募る体験型のイベント「うべ探検博覧会」も平成22年から毎年実施しています。今年度の博覧会には、地域の皆さんから、およそ50もの魅力的な体験プログラム(地域資源)が提案され、市内外から多くの方が参加しました。

**安田** 私もまちを売り込むに当たっては、何よりも市民の意識が非常に重要だと思います。その点、天草市民はその意識が高く、行政としても大変心強い。自分たちのまちに誇りを感じる市民が多いのもその背景にあるのだと思います。

そのきっかけになったのは、世界遺産登録に向けた活動です。天草市では、目下、長崎県と連携して、キリスト教の関連遺産の世界遺産登録に向けて取り組んでいます。昨年の6月には「天草の崎津集落」が、構成資産入りすることが決定。こうした中で、多くの市民が自分たち





細野 助博  
(中央大学総合政策学部教授)

て集客プロモーションを展開しましたし、首都高速道路さんと組んで、パーキングエリアを活用して各種媒体を配布し、メディアミックスによる告知を行うなどしてきました。

首都圏へ向けたシティプロモーションの拠点であるアンテナショップ「三浦市東京支店・なごみま鮮果」も、大学(明治大学)との連携の成果です。明治大学のプロデュースという名目で、学生が事業主体となり、三浦市の特産品販売、観光情報発信を行っていた。それがそのまま地域連携・マーケティングなどの実践教育の場としても機能しています。一方で、三浦市は職員一人を派遣するものの、家賃は大学に支払っていただくことで、厳しい財政状況の中でも、まちの売り込みを図ることができる。双方がメリットを感じる、ウィンウィンの関係が構築されていますから、非常に連携はうまくいっています。

**山脇** 統一された方針の下に情報発信をすること。シティプロモーションを効果的に展開し、まちのブランド力を高めるためには、これが大切です。豊川市がシティセールス戦略プランを策定した理由の一つもそこにあります。市民、NPO、地域、企業、大学、行政が連携して取り組むことができるよう、基本的な考え方を共

有する必要があったのです。今年のB-1グランプリにおいて、豊川市だけで宿泊客を受け入れることは難しいのですが、近隣市町村と協力しながら対応していくことで、広域的なメリットが生まれてくると思います。

**安田** これからの時代は、他自治体との連携も重要になると思います。例えば、二地域就労促進事業においても、天草市で成功したプロジェクトを、同じ条件の地域に水平展開すれば、全国共通の課題の解決も図れるし、天草の認知度の向上にもつながる。その一方で、プロジェクトを企画・検討する段階で、「それは天草市では取り組むことができないが、三浦市では需要があるのでは」という場合が出てくれば、こちらから三浦市に働き掛けるといってもできます。そう考えると、単一の自治体の目線で考えるよりも、さまざまな自治体と連携を組んだ方が、よりよい地域づくりができる。そうした観点から、実はこの2月には京都大学と共同で、二地域就労の「市町村連合」を設立する予定です。

**久保田** 宇部市では、企業による生産活動や社会貢献活動などを企業OBや郷土史家がエスコートして解説しながら産業観光を楽しむ「大人の社会派ツアー」を平成20年から、隣接する美祿市や山陽小野田市と組んで実施しているほか、平成24年には、築地場外市場の一面に、宇部市と萩市の鮮魚や水産加工品等を扱うアンテナショップ「萩と宇部のおいしい魚屋Bucchiline(ブッチーネ)」もオープンしました。一つの自治体ではできないことも、複数の自治体が連携すれば実現できるし、可能性も広がる。そのことを痛感していますね。

**細野** 他地域に誇れる地域資源を、どのように

売り込むのかという視点で、お話しいただきました。共通していたのは、アイデアやコンセプトなど、その地域ならではの戦略手段をいかに組み入れるかということでした。

そして、もう一つはネットワークの重要性です。決して行政だけで実施するのではなく、市民や企業、場合によれば、他自治体なども巻き込んで進めることで、効果的な売り込みが可能になる。その意味では、本日のテーマであるシティプロモーションとは、新しいネットワークづくりの仕組みの一つといってもいいかもしれません。

今後も、さまざまな活動主体と手を取り合い、息の長い取り組みとして、シティプロモーション活動を推進し、まちの持続的な発展に結び付けていただきたいと思います。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成25年1月30日、全国都市会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は5月号に掲載予定です。



# 特集

## 産業観光でまちを活性化

観光ニーズの多様化で、注目を集めているのが、産業遺産や稼働中の産業施設（工場や工房）などを活用した「産業観光」。ものづくりにまつわる地域の特色をアピールして、産業振興と観光を活性化する試みとして全国の都市自治体で取り組みが進んでいます。

特集では、産業観光が注目される背景や現状、産業観光を推進するポイントなどについて探るとともに、実際に地域資源を生かし産業観光を推進している都市事例を紹介します。

寄稿 1

### 産業観光の意義とその振興へ向けて

横浜商科大学商学部貿易・観光学科教授 羽田耕治

寄稿 2

### ものづくりのまち 室蘭の観光資源を市民とともに探る

室蘭市長 青山 剛

寄稿 3

### 躍動する あきしま ～産業観光で まちを元気に～

昭島市長 北川穰一

寄稿 4

### 既存の観光と新たなにぎわいの創出

常滑市長 片岡憲彦

# 産業観光の意義とその振興へ向けて

横浜商科大学商学部貿易・観光学科教授

羽田耕治 はだこうじ



## 産業観光とは何か

産業観光という言葉は、そのかたい響きのためか、必ずしも一般的な用語ではなかった。しかし最近ではマスメディアにもよく登場し、一般的になってきた。地域における産業観光の振興に長年にわたり取り組んできた立場からすると、非常に嬉しい限りである。

産業観光の意味するところは、文字通り、「産業活動を観光資源として利用する観光（活動）」というものであり、その産業活動を広く解釈すれば、農林漁業や製造業、サービス業など、多様な産業生産活動を利用の対象とする観光といえる。さらに、現在では衰退、消失してしまった、古の産業活動の遺産を対象とする観光も産業観光といえることができる。

もともと、こうした産業観光のとらえ方は必ずしも共通のものではない。近代的・現代

的な製造業の生産活動を対象とする観光活動として産業観光を限定的にとらえる考え方も少なくはない。産業観光のとらえ方はさまざまである。

## 産業観光の歴史と「概念」の広がり

産業観光のとらえ方がさまざまであることの理由として、「観光利用の対象となる産業」が産業社会の発展と変容とともに拡大してきたことが挙げられる。

工業化・近代化が進展した時代は、近代的な製造技術の成果（製造工場・設備・技術・製品）を対象とする観光が産業観光として成立した。国際博覧会の見物などはその象徴といえる。

わが国においては、昭和30年代後半から40年代に大量の周遊観光が発生し、食品製造業のように消費者になじみが深い消費財を生産する工場の中に立ち寄り周遊観光利用に対応し、製品PRの場として観光集客

を意図した工場が開設されるようになる。昭和50年代になると社会の成熟化を背景に近代化に伴う弊害への反省と懐古が生まれ、手づくりの味わい深い伝統的な地場産業に

触れる「工芸観光」が脚光を浴びてくる。そして平成に入り、産業の高度化の波の中で老朽化・陳腐化を余儀なくされた生産施設・設備など―産業遺産を活用した観光施設・観光空間が世間の耳目を集めることとなる。

農林漁業についても工業化・都市化の進展とともに観光の対象となってくる。「グリーン・ツーリズム」という概念が注目されるようになったのは比較的最近のことであるが、そもそも果樹などの農産物の収穫体験・加工体験をはじめとした農業体験観光は戦前から見られ、とりわけ昭和40年代に大きく発展した。都市住民による観光レクリエーション利用と関連付けて農林漁業・農山漁村の振興を図ろうと、農林水産省が本格的に取り組み始めたのは昭和40年代後

半のことである。

いずれにしても、このように産業社会の発展・変容、そしてそれを背景とした旅行者ニーズの変化とともに産業活動を対象とする観光の範囲も拡大し、それと同時に「産業観光」の概念も広がってきたのである。

## 産業観光への注目の背景

これまで見たとおり、産業観光は産業化（工業化・近代化）が進展した時代より存在していた観光である。それが、なぜ今、注

目されてきたのか。

## 地域の特性に触れ、学ぶ観光の台頭

全国的にも著名な自然資源や歴史文化資源を有する観光地の多くが今では観光利用の大幅な減少、低迷にあえいでいる。もはや単に美しい自然や壮麗な歴史的事物を見て回るといった、ありきたりの観光では人々は満足しない。自由時間活動への志向が多様化し、消費者の旅行への志向も多様化、そして高度化、深化してきており、そうした中で地域固有の魅力・特性に触れ、体験し、学ぶ、いわば「自己実現・自己啓発」タイプの観光が志向されている。

元来、自己実現・自己啓発は自由時間活動の基本的機能の一つであり、エコツーリズムやヘリテージツーリズムなどもそうした自己実現・自己啓発型の観光であり、現在注目されている産業観光もまた同様である。前述の通り、産業観光は以前より存在したが、従来の産業観光はおおむね「単なる物珍しさからの見物」とどまっていた。対して、現在、脚光を浴びている産業観光は、地域の人々、生産に携わっている（携わったことがある）人々との触れ合いや交流を介した「見学と体験」、そこに生まれる知的充足感がポイントになっているように思われる。

## 産業観光の振興へ向けた地域側の期待

今や全国1700余りもの市町村のほとんどが観光を通じた地域の活性化に取り組

む時代である。観光とはほとんど縁がなかった、観光の振興には関心がなかった大都市圏に位置する都市においても観光を通じた地域の活性化気運が盛り上がりつつある。そうした中で製造業を主として産業振興に取り組んできた都市では、産業構造の転換・変貌を背景に新たな産業の振興を目指して観光の振興を図ろうとしても観光資源には恵まれないケースが少なくない。そこで持ち前の産業集積を生かし、さらには発展させながら新たな産業振興を図る有力な方策として産業観光の振興が、大都市圏、地方圏を問わず志向されるようになってきているわけである。

## 産業観光の取り組みによるメリットへの企業側の理解

企業の社会貢献、地域貢献の必要性が指摘されて久しいが、産業観光はそうした企業の社会貢献・地域貢献を企業目的と整合させる格好の手段である。

産業観光に取り組むことによって、企業自体に期待される意義、効果は次のようなものである。企業理念などのPR、社会的イメージの向上、モノづくりの意義・大切さへの理解、人材の育成促進と獲得、製品PRと販売機会の拡大、最終ユーザーからの情報収集、（第三者に見られることによる）工場内の従業者の意欲向上・整理整頓の徹底と品質向上など。企業の特長や立ち位置



「学びの観光」としての産業観光（川崎市）

# ものづくりのまち 室蘭の観光資源を市民とともに探る

室蘭市長（北海道）

青山 剛



## ものづくり100年のまち室蘭

平成24年、開港140年市制施行90年を迎えた室蘭市は、北海道の西部の内浦湾（別名、噴火湾）に面し、突出した馬蹄形の半島を有し、天然の良港を有する北日本を代表す



「ポルタ」は、市民や観光客に愛されている鉄のまちのPRキャラクター

る工業都市である。100年以上の歴史を有する鉄鋼をはじめ、石油化学、セメント、造船などの基幹産業に加え、近年ではリサイクル産業としてPCB廃棄物処理事業に取り組みんでおり、環境産業とまちづくりを融和した「緑の工業都市」を目指している。

明治5年には、札幌と函館をつなぐ交通の要衝として、噴火湾を隔てた森町との定期航路が開設され開港した。明治25年には、室蘭―岩見沢間に鉄道が敷設され、夕張などの空知地方で産出された石炭の積出港として室蘭港は発展し、明治40年には日本製鋼所、明治42年には輪西製鉄場（現・新日鐵住金室蘭製鐵所）が相次いで設立され、日本の近代化と共に、工業のまちとして歩み始めた。大正11年の市制施行時には、人口が5万人を数えた。太平洋戦争末期には、艦砲射撃の被害も受けたが、戦後、鉄鋼業や造船業は軍需から民需へと転換を図り、日本の戦後復興の一翼を担った。その後、日本石油精製（現・JX日鉱日石エネルギー）などの企業進出もあり、一層の工業都市化

が進み、昭和40年には東北・北海道で初の特定重要港湾（現・国際拠点港湾）に指定され、その重要性はますます高まり、昭和44年に人口が18万人を突破するなど順調な発展を遂げた。しかし、ドルショックや2度にわたる石油危機による経済不況と、それに伴う基幹産業に合理化の波が押し寄せ、人口減少へ一転するなど、多くの試練も受けた。その典型が、鉄のまちのシンボルである溶鉱炉の休止方針である。しかし、官民一体となった存続の取り組みにより存続され、今日では世界の特殊鋼基地へとつながり、現在では、自動車主要部品を製造しており、2次加工、3次加工メーカーの進出に至っている。

製鋼分野では、エネルギー関連製品を多く手掛けており、発電所の心臓部ともいえる圧力容器やタービン、近年では洋上風車の製造も手掛け、風力発電の一貫生産を担っている。これらは、世界最大規模の1万4000tプレス機が、技術の高さを極めている。セメント分野では、リサイクル事業にも積極的に取

などによっても産業観光への取り組み方は異なるが、産業観光が一般的になるに伴って、産業観光への取り組みを通じたメリトへの企業側の理解が深まってきたことも大きい。

## 産業観光の振興へ向けて 自治体に求められること

産業観光の振興へ向けて、地域として講



産業遺産を活かしたカフェテリア・ベーカリー（桐生市）

じるべき主要な施策を列挙すると、以下の事項が挙げられる。

- ・産業観光資源への「気付き」…産業観光の対象には流通サービス業や農林漁業関連も入る。また小規模であっても特徴ある商品を提供している事業者（老舗店、名物店など）も魅力的な対象となる。
- ・受け入れ企業・施設の組織化と拡大…産業観光振興への理解と協力に向けた気運を醸成する。安全管理や企業秘密保持の問題などから企業の中には利用者の受け入れに消極的な場合が少なくない。そうした企業側の不安を解消するためには、あらかじめ「受け入れ条件」を詰め、明確にしておく必要がある。その上で受け入れ候補企業・施設の受け入れ条件を整理したデータベースを作成する。
- ・産業観光情報の発信…既存の観光関連HPの拡充、産業観光魅力の紹介に特化したパンフレット制作など（含む、産業観光魅力を組み込んだモデル観光コースの設定）。
- ・産業観光ガイドの育成と組織化…受け入れ企業・施設においては当該事業所・施設の社員・職員が案内対応するケースが多いが、地域内各所に散在する対象事業所・施設間を移動する際に案内役を務めるガイド役が不可欠である。地域の産業集積の背景、基盤にある自然風土や歴史

的背景、産業連関もが産業観光魅力となるのであり、そうした地域特性と結び付けた案内が欠かせない。

- ・産業観光振興に対する市民の理解促進…市民向け産業観光ツアーの実施、シンポジウムの開催などによる。
- ・旅行会社へのプロモーション…とりわけ産業観光と親和性の高い教育旅行誘致へ向けた働き掛けを推進する。
- ・産業観光ツアーの商品化…いわゆる「着地型旅行商品」の一環として、産業観光ツアー商品を開発・販売する。

これらの施策は、行政・観光協会・商工会議所などがそれぞれ連携あるいは分担しながら取り組んでいくこととなるが、「どこ」が中心となるか、地域事情もあり、「正解」はない。

筆者自身が「産業観光振興協議会長」として当初より牽引してきた川崎市の産業観光振興の場合は、行政および商工会議所（いずれも立ち上げ、そして継承した担当職員）の力が大きかった。産業観光の振興に当たっても行政に求められることは、「（計画的に）芽出し、後押し、橋渡し」することであり、「橋渡し」の一方を担ぐ関係団体と密な連携体制を組むことであると考える。各都市で産業観光の振興がますます進展することを祈念したい。



室蘭港の入り口に架かる東日本最大のつり橋「白鳥大橋」のライトアップとイルミネーション(上)。目の前に広がる工場夜景で見る人を魅了した夜景見学会(左)



り組んでいる他、造船分野でも、スーパーエ  
コシップの製造にも取り組んでいる。新たな  
環境産業の取り組みでは、平成20年から、北  
海道と北関東以北15県のPCB廃棄物の無害  
化処理事業を開始し、全国に貢献する事業に  
取り組んでいる。

### 登別洞爺広域観光圏の中の室蘭

工業都市室蘭は、豊かな天然の観光資源  
にも恵まれている。地球岬などを含めた断  
崖絶壁が数十km連なる美しい景観があり、  
平成24年には文部科学省から「名勝ピリカノ  
カ」として文化財指定を受けている。自然の  
豊かさを象徴するのは、野鳥の種類が豊富  
なことや鳴り砂海岸を有する他、イルカ・  
鯨ウオッチングの拠点となっており、観光  
客はもとより地元の子どもたちや室蘭工業  
大学生にも喜ばれている。こうした観光資  
源をPRしようと、市民観光ボランティア  
が観光客にガイド活動を行っている。

一方、近隣には、登別温泉をはじめ北海道  
洞爺湖サミット2008の舞台となった洞爺  
湖温泉、洞爺湖有珠山ジオパーク、白老町の  
アイヌ文化の伝承施設といった魅力が豊富で  
ある。全国各地からの旅行者に加え、アジア  
圏を中心に、外国人観光客の入り込みも多い。

### 「ものづくりのまち」が 生み出す観光資源

本市のものづくりは、苦難の歴史を乗り

も販売され、鉄のまちのPRに一役かっ  
ている。NPO法人が、商店街の空き店舗を工房  
として製作・販売を行うユニークな取り組み  
で、反響は大きくなっていった。その後、ポ  
ルタを製作する工房での製作体験が可能とな  
り、体験型産業観光の基礎が出来上がった。  
また、室蘭工業大学でも「ものづくり基盤セ  
ンター」を平成18年に開設し、企業との共同  
開発や学外向けの体験実習も可能となり、主  
に研修旅行生らに、ものづくり体験を通し、

越えてきた。前述の溶鉱炉存続を求める市  
民の思いを乗せて点灯を開始したのは「測量  
山ライトアップ」である。標高200mに満  
たない山の山頂にあるテレビ放送のアンテ  
ナを鮮やかな光で彩り、市民がそれぞれの  
思いを託して1日4000円を添え応募す  
る。昭和63年から連続点灯し、今年7月に  
は、9000日を達成する予定であるが、  
市民の希望の灯りとして親しまれ、市民力  
のシンボルとなっている。

平成10年、室蘭港口に東日本最大のつり橋  
である「白鳥大橋」が完成した。構想から40年、  
まさに市民の悲願叶って出来た橋である。全  
長1380mのこの橋は、室蘭工業大学を含  
め市内企業の技術の産物であり、白く大きな  
ウイングを広げる優美な姿は、青い港によく  
映える。夜になると、隣接する風車で発電さ  
れた電気で橋をイルミネーションが飾り、昼  
夜を問わず力強くもしなやかな姿で、見るも  
のすべてを魅了する。

観光にはグルメの要素は不可欠である。噴  
火湾に位置する室蘭は、海産物も豊富で、胆  
振管内最大の水揚げを誇る。市の魚であるク  
ロソイや、ブランド化を図るホタテ「蘭扇」、  
スケトウダラなどの魚種も豊富だ。加えて、  
市民の味として昔から親しまれているのは  
「室蘭やきとり」と「室蘭カレーラーメン」であ  
る。室蘭やきとりは、串に豚肉と玉ねぎが刺  
さり、洋ガラシを付けて食べるというスタイ  
ル。室蘭カレーラーメンは、市内ラーメン店

製作する喜びを与え、理化学分野に関心を  
もってもらう取り組みを図っている。

平成21年9月、普段目にしていない夜景が、  
観光資源であることを市民に再発見してもら  
おうと、市の広報紙で夜景特集を組んだ結  
果、大きな反響を呼んだ。臨海部の工場の保  
安灯の灯りが、鮮やかな夜景を演出する室蘭  
らしさであることに市民は気がつき、まちの  
誇りとして感じ始めた。同じ頃、首都圏を中  
心に工場夜景観賞がブームの兆しを見せ、幅  
広い年齢層からの観光コンテンツとして人気  
が高まり、平成23年2月に、川崎市、四日市  
市、北九州市に本市を加えた4市で、日本四  
大工場夜景宣言を行った。昨年は、4市に周  
南市を加えた全国工場夜景サミットを室蘭で  
開催。全国に向けて工場夜景の美しさや力強  
さなどの魅力を発信するとともに、工場夜景  
観賞を観光資源として取り組む都市間連携を

から広まり、札幌の味噌味、旭川の醤油味、  
函館の塩味に続く北海道第四の味として定着  
している。いずれも塩辛いものを好むとされ  
る職工さんが労働のあとに口にする、ものづ  
くりのまちが生んだグルメと言える。

### 産業観光のアプローチからみた 新たな可能性

世界に誇る匠のたくみものづくり技術現場の見学  
や体験は観光資源に生かせることから、平成  
10年改訂の観光振興計画内で、「工場群と企  
業所有施設を活用した産業観光開発を進め  
る」と記しており、翌年より、産業観光振興  
の具体的な取り組みが始まった。「ものづくり  
と産業観光」をテーマとしたシンポジウムを  
契機に、工場見学会など、市内企業の協力を  
得て実施された。それまでも、学生の社会科  
見学など、受け入れ実績はあるものの、稼働  
中の工場に一般客を受け入れることは、安全  
面での十分な配慮を要することなどから、観  
光を目的とした見学は慎重な企業もあり、課  
題は残る。

「鉄のまち」と言われる室蘭に、鉄をイメー  
ジする工芸品がないという市民の声の高まり  
から、平成17年には大学生や商店主らが協力  
し、手のひらサイズのボルト・ナット製の人  
形「ボルト」を開発した。無機質な材料だが、  
愛くるしいポーズが市民の間で人気を呼ん  
だ。ハンドメイドの100種類以上のボルト  
は、新千歳空港や札幌市内の土産物店などで

深め、魅了向上に努めることを確認した。ま  
た、サミットに合わせて、JX日鉱日石エネ  
ルギー室蘭製油所の夜景見学会を全国で初め  
て実施し、迫力ある工場夜景を身近に感じた  
ほか、養成された市民ガイドも活躍するな  
ど、大きな成果を上げた。工場夜景は、幾多  
の試練を乗り越えた歴史の輝きであり、今後  
の産業の希望を与えてくれる情景である。

これらの動きが奏功し、昨年あたりから新  
たな動きがいくつか生まれている。北海道を  
築く基礎となった三都(室蘭、小樽、空知)の  
つながりをクローズアップした「炭鉄港」事業  
は、それぞれが他を学ぶ広域的な産業観光の  
動きだ。新たな魅力を情報発信することで、  
映画やテレビのロケ地として数多く採用さ  
れ、経済効果も生んでいる。また、天然の良  
港や周辺観光地への評価が高いことから、ク  
ルーズ客船の寄港が相次いでおり、今年は過  
去最多の8隻が室蘭港に入港する。中でも、  
13万8000t級のクルーズ船入港も予定さ  
れており、外国人客へのおもてなしには市民  
力が不可欠である。

産業観光は、産学官民が連携し、地域の自  
然、産業、生活、歴史、文化などの地域固有  
の素材を発掘し、観光資源化することで新た  
な交流を生む。推進にあたっては、市民に地  
域資源を再発見・実感してもらい、ものづく  
りのまちとしての自信と誇りを持ってもらう  
ことが大きなポイントであろう。

# 躍動するあきしま 産業観光でまちを元気に

昭島市長（東京都）

北川 穰一



## はじめに

平成25年度の政府の経済見通しによれば、わが国の経済は、世界経済の緩やかな回復が期待される中で、日本経済再生に向けて、大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略の「三本の矢」により、長引く円高・デフレ不況から脱却し、着実な需要の発現と雇用創出が見込まれ、景気回復へ向かうことが期待されている。しかしながら、海外経済の不確実性や電力供給の制約などにより、先行きの不透明性は払拭できていない状況にある。

こうした中、基礎自治体である本市としても、全てを国や東京都に委ねるのではなく、さまざまな産業振興策を展開し、地域からも景気回復の取り組みを進めていかなければならないと考えている。

## 市の概要

昭島市は、東京都のほぼ中央に位置し、11万3000人を超える人口を有するまちである。多摩川や玉川上水、市内に点在する湧水や

ている。取り組みは大きく分けて次の4つに分類される。

### 1 地下水100%の水道水の活用

地下水100%の水道水は、食品や嗜好品などにも活用され、観光資源としてのポテンシャルも高く、その可能性が十分生かされるよう環境整備を進める。

### 2 観光資源となる企業の活用

筆筒や椅子を中心に国内外の歴史上の家具を展示する「家具の博物館」、日本のジェットエンジンの歴史をたどることができる「空の未来館」、そして、ものづくり企業の生産現場などを見学する取り組みを行い、企業の有する施設を産業観光資源として活用する。

### 3 駅を中心とした観光まちづくりの推進

平成27年度を目途として、JRの青梅線、五日市線、八高線と私鉄の西武線が乗り入れる拝島駅前を開発を進めていく。この拝



北泉寮

島駅をはじめ、市内の各駅を市外から多くの人に訪れてもらうための重要な拠点とし、産業観光の新たな視点から観光まちづくりを進める。

### 4 観光ウォーキングコースの開発

市内には、「北泉寮」や「青年学

樹林地など、比較的豊かな自然に恵まれ、豊富な地下水は、都内で唯一の地下水100%の水道水としてわれわれの生活を潤し、かけがえのない市民共有の財産となっている。

昭和36年に多摩川でくじらの化石がほぼ完全な形で発見され、「アキシマクジラ」と命名された。日本がまだ大陸と地続きであったであろう頃、昭島市の周辺が古東京湾の波に洗われる海浜であり、多摩川の河口となっていたことが想像される。現在は、公園やイベント、そして銘菓などにくじらの名前を取り入れるなど、本市をアピールするシンボルとなっている。

市の中央を東西に走る青梅線沿線を中心として、中神工業団地などに電子機器や輸送用機械器具関連などの製造業が集積し、一方、国道16号線の拝島橋周辺には物流会社の配送センターが集中している。また、中小企業や農林水産業を経営、技術、人材面から支援する東京都の「産業サポートスクエア・TAMA」が平成22年に市内に整備され、多摩地域の新たな産業支援拠点となっている。

昭島市は、交通アクセスにも恵まれ、自然環境と暮らしと、そして産業が調和した都市として発展してきた。

本市の考える産業観光とは、地域の構成主体である市民、事業者、団体、行政が相互に連携、協力をし、地域の歴史や文化、産業、自然など、さまざまな観光資源を生かしながら人々の交流を促進し、にぎわいと活力あふれるまちを実現していくものである。その実現のためには、観光まちづくり協会をはじめ、市民や企業、そしてさまざまな団体が主体的にかかわり、ともに連携し、昭島市の魅力を見つめ、わがまちに自信と誇りを持つことが重要であると考えている。

## 産業観光の具体的な取り組み

### 1 観光まちづくり協会

平成23年2月に観光まちづくり協会を設立し、4月には昭島駅北口に観光案内所を開設した。市では観光まちづくり協会の運営費を助成し、協会を中心として、訪れる人の多様なニーズに応えた本市の観光資源の活用や、観光案内所の多面的な活用を図っている。

### 2 フードグランプリなどのイベント

昭島駅の北側に位置する昭和の森内の銀杏並木で、昨年11月に初めて「昭島ブランド・フード

境と暮らしと、そして産業が調和した都市として発展してきた。

## 産業観光の基本的な考え方

平成23年から10年間を計画期間とする第5次総合基本計画では、市の将来都市像を「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市 あきしま」も、まちも、緑も健康・健全で、活力と魅力にあふれた元気なまちを創り上げ、次世代に責任をもって引き継いでいく、このことを新たなまちづくりの大きな目標としている。

人が集い、にぎわいを創り出す、魅力と活力にあふれた元気なあきしまを実現していくためには、市内の企業や事業者が元気でなければならぬ。地域経済の活性化は、税収や雇用などに大きく関わり、市民生活の向上に直結するからである。

本計画では、目標を達成すべき施策のひとつとして産業の活性化を掲げており、あきしまらしさを生かした産業観光を進めていくこととし



フードグランプリ(表彰者)

「フードグランプリ」を開催した。このフードグランプリは、市内の商店や団体が自慢の料理や商品を出品し、昭島ブランドを創りあげることが目的とするもので、商工会、市内企業、関係機関などから、協賛金や実施方法などの面において、多大な理解と協力を得て実施することができた。併せて、市の職員が各店舗にボランティア参加し、職員のまちづくりに対する意識を醸成することもできた。

今後、市内の農畜産物やものづくり企業などの製品を紹介し、販売する「産業まつり」、商工会が中心となり花火の打ち上げやくじらのパルーンを先頭に市内をパレードする「くじら祭」、観光協会が中心となり昭島に古くから伝わる山車や囃子、神輿などの伝統芸能を一堂に会して実施する「郷土芸能まつり」などととも、昭島



陶製招き猫

## 既存の観光と 新たなにぎわいの創出

### はじめに

常滑市は、愛知県知多半島の西海岸の中央に位置し、西は伊勢湾に面している。名古屋までは電車で約30分、車で約40分の距離にある。昭和29年4月1日に市制施行し、平成26年4月に市制60周年を迎える。人口は、平成17年2月の中部国際空港セントレアの開港後、空港関連従業員の転入やニュータウン事業の進捗などにより、増加しており、平成25年2月1日現在、5万6692

人である。

日本六古窯のひとつに数えられ、千年の歴史を誇る焼き物のまちである。昭和30年代には、300から400基の煙突があったといわれ、黒い煙が空になびいていたため、「常滑のスズメは黒い」と言われていた。小判を抱えた2等身の陶製招き猫は、常滑系と呼ばれ、全国の約8割が生産されている。

### 近年の主な産業と今後

主要産業の常滑焼は、伝統的工芸品である急須や植木鉢、招き猫などの置物の生産で知られている。最近では、焼酎サーバーや陶器の浴槽など、新たな製品開発を行い、市場拡大を図っている。建築陶器や衛生陶器の大手メーカーである(株)INAX(現(株)LIXIL)は、常滑市が創業の地である。昨年、東京駅復元に積極的に取り組んだ(株)LIXILは、市内のタイムメーカーとともに、ものづくりの経験と実績を

駆使して、現存する赤れんがと違和感なく調和する復元れんがを作製し、価値ある産業文化事業に常滑焼の陶業の実力を後世に残すこととなった。

また、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、ノリの養殖などの水産業やイチジクを始めとした農産物の出荷も盛んに行われている。

中部国際空港セントレアは、日本で3番目の国際拠点空港として、伊勢湾海上に開港した24時間空港であり、約1.2kmの道路橋および鉄道橋で市街地と結ばれている。また、空港島と空港対岸部は「中部臨空都市」と呼ばれ、愛知県により埋め立て造成された。空港を核とした陸・海・空の交通アクセスに優れた立地と最先端の都市機能を備えた次世代型産業拠点として、分譲中である。平成23年12月には、空港島の一部が「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」に指定されたことに伴い、中部地方の次世代成長産業として航空宇宙分野への期待が

常滑市長(愛知県)

片岡憲彦



の元気・魅力を発信するイベントとして、引き続き実施していく。

### 3 産学官連携による取り組み

平成25年度においては、関東経済産業局や産業サポータースクエア・TAMAなどの国や東京都の関係機関、多摩地域の大学、商工会、事業者ネットワーク、そして金融機関などで構成する(仮称)「産学官検討委員会」を立ち上げ、観光産業をはじめとした産業振興の方向性を確かなものとし、その後の具体的な取り組みにつなげていきたいと考えている。

### 産業観光の課題

産業観光の拠点となる観光まちづくり協会は、設立から3年目を迎え、真価が問われる年となる。市ではこれまで協会に対し運営費を助成してきたが、将来的には協会が自主財源を確保し、その財源において、自立した運営をすることが望ましい。しかし、景気の低迷などの影響もあり、観光まちづくり会員が増えず、また、観光案内所における売上げも伸び悩むなど、まだまだ、その道のりは厳しいものがある。今後は、自主財源の確保という視点を重視した事業の展開も含めた取り組みを推進していく必要がある。

次に、昭島の水に付加価値をつけて観光資源にすることについてである。昭島の地下水100%の水道水そのものを商品として販売することは、さまざまな事情から困難性があるが、市の誇れる観光資源でもあることから、柔軟な発想のもと、昭島の水を利用してつくる特産品

の開発や自然環境に配慮したシステムづくりなどについて、さらに検討していく必要がある。

次に、商工会と観光まちづくり協会との連携の強化についてである。本市の観光産業の中核ともなる両機関の連携が十分に行われているとは言えない状況である。商業、工業、建設の各分野の企業や事業者で構成される商工会の持つノウハウを産業観光に反映させることは重要であり、市が橋渡し役となって商工会と観光まちづくり協会の連携をさらに深めていかなければならない。

次に、地域間交流の促進についてである。青梅線、五日市線、八高線沿線エリアには約50万の人口があり、併せて観光などで多くの集客を期待できるポテンシャルがある。現在、「青梅線沿線地域産業クラスター」という産業支援のネットワークにおいて五日市線や八高線も含めた地域間交流を進めている。今後は、それぞれの地域の特性を生かした地域間交流ブランドを検討するなど、西武線沿線エリアも含めた広域的な産業観光を推進していく必要がある。

### 結び

本市は、平成23年に社団法人日本観光協会から産業観光まちづくり大賞奨励賞を受賞した。これは、市内企業や商店会、市民ボランティアなど地域が観光によるまちづくりに一体となって取り組む姿勢や、今後の産業観光の大きな可能性に対して高い評価をいただいたものである。昨年は、産業や企業の建て直しなどの調査を目的として、遠くスウェーデンから、議員など

で構成する26人の視察団が本市を研修視察し、有意義な情報交換の場を持つことができた。

本年には「スポーツ祭東京2013」が開催され、本市では軟式野球競技を行う。会場となる昭島市民球場は、東中神駅からのアクセスが良いことから、駅周辺から会場まで、色とりどりの花や歓迎装飾を施すとともに、市の特産物の販売や市内企業の紹介なども行う予定である。この「スポーツ祭東京2013」を機に、昭島市の魅力を全国に発信していきたいと考えている。

「人・まち・緑の共生都市 あきしま」を将来都市像とする第4次の総合基本計画、そして「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市 あきしま」を将来都市像とする新たな第5次総合基本計画に基づいて、将来を見据え、市民、企業、商工会、観光まちづくり協会などの関係機関、そして昭島市議会のご指導とご協力を得ることも、市の職員の尽力により、これまで市長就任以来16年にわたり昭島のまちづくりを推進してきた。その結果、元気都市あきしまの実現に向け、徐々にではあるが、これからの産業観光によるまちづくりの形が見えてきた。

今後も、市内に点在する産業施設などを魅力ある観光資源として市の内外に発信し、産業観光のさらなる推進に向けて、観光まちづくり協会の取り組みを支援するとともに、商工会などの関係機関との連携を深めて、物心両面から昭島らしい観光のまちづくりを推進してまいり所存である。

高まっている。本市としても、先端産業の一大集積地となるように、地域を挙げて取り組んでいきたいと考えている。

### 産業遺産の活用と課題への取り組み

昭和49年に、市の中心市街地であり、焼き物産業の中心地であった地区に「やきもの散歩道」をコース設定した。標高3mから20m



土管坂

と起伏に富んだ地形に、土管坂を始めとした土管・焼酎瓶の擁壁、陶器を埋め込んだ路地、れんが造りの煙突など、常滑焼千年の歴史が肌で感じとれる屋外型の産業観光エリアとなっている。主な公共施設は、国の重要有形文化財「登窯」、その隣に休憩や土産物が購入できる登窯広場展示工房館、約150年前に栄えた廻船問屋を復元整備した市の文化財・廻船問屋瀧田家、そして焼き物文化の創造と発信の地「とこなめ陶の森(資料館、陶芸研究所、研修工房)」がある。

また、コース内には、ものづくりの心を伝える、体験・体感型ミュージアムの「INAXライブミュージアム」、陶芸作家の工房やギャラリー、飲食店なども軒を連ねている。大正・昭和の雰囲気を残す古いまち並みは、たびたび映画やテレビのロケ地に選ばれている。

産業遺産を生かした観光資源の「やきもの散歩道」への来訪者は、年間約29万3000人(平成24年実績)で、名古屋をはじめ愛知・岐阜・三重の東海3県在住の50歳代以上の女性グループが中心となっている。一方、約300世帯が、「やきもの

散歩道」としてコース設定された地区に居住しているが、窯業とは関係のない住民も生活している。

来訪者が増加するにつれ、住民の生活面での負担や制約、来訪者とのトラブルも起こってきた。また、地場産業「常滑焼」の長期低迷による廃業に伴った、れんが造りの煙突・窯・工場などの取り壊しと、空港開港による、戸建・集合住宅の建設が急増し、景観を維持していくことが困難となっている。

このような背景から、平成18年度に「常滑市観光まちづくり推進協議会」を組織し「常滑やきもの散歩道 観光まちづくりコミュニティ」を事業として、住む人・働く人・訪れる人の相互理解と協力関係の構築に向けて、「と題した調査を、住む人・働く人・訪れる人を対象に実施した。その結果、観光地として歩んでいくことの課題が整理された。

課題の一つは、「観光資源を保全する仕組みがない」ということであった。れんが造りの煙突などは、魅力的で保全すべき貴重な地域資源であり、観光資源になり得ることが再認識されたものの、それらを保全していく仕組みがなかった。こうした地域資源が住民の所有物であることについて、営業

者などの認識が希薄でもあった。

浮き彫りになった課題に対して、住民、来訪者、営業者、行政、ボランティアなど、立場の異なる者が相互に理解した上で連携しながら、解決に向けて積極的に進めていくことが、産業遺産を生かした観光につながると思われる。

平成22年4月、れんが造りの煙突などの地域資源を保全することを目的に、やきもの散歩道Aコースの沿道および周辺を対象地域として、「常滑市やきもの散歩道地区景観計画」を定めた。これは、景観計画区域内で行う建築行為などに対し、一定の基準を設け、良好な景観形成を図るものであった。この地では、今も「ものづくり」が受け継がれているとともに、まち並みに誇りを持つ人々が生活していることにより、支えられ、そして守られている。こうしたことから、今後の景観形成に関する取り組みは、ものづくりや生活を続けることができるような、まちづくりと一体となって進めることが重要となる。そして、住民一人ひとりが住んでいるまちに誇りを持つことこそが、まちづくりの第一歩ではないかと考える。

### 時代とともに産業観光の魅力をアップ

平成24年5月、中部国際空港セントレア

のアクセスプラザ1階に、常滑市の観光案内所とポートルースの場外舟券発売場の機能を併せ持った「オラレセントレア」がオープンした。焼き物のまちにふさわしく、上海万博で話題となった「黄金のトイレ」、ポートルースの6色にちなんだ「6色の陶製招き猫」、そして超特大サイズの「常滑焼の大急須」が展示されている。

また、空港対岸部に位置するりんくう地区に、平成24年12月、工場見学のできる観光施設「めんたいパークとこなめ」がオープンした。これまでは、ホテル、結婚式場、大型飲食店などが進出していたが、大規模な来訪者の見込める施設が初めて進出し、週末には、大勢の来館者でにぎわっている。今年4月には、小型艇から大型艇まで保管に対応できるマリナー施設、8月には中部地区1号店となる会員制大型倉庫店、



めんたいパークとこなめ

平成26年には大型商業施設がオープンする予定であり、にぎわいの創出の成果が徐々に見え始めている。これらにより、常滑市への来訪者は増加すると思われる。また、りんくう地区へ進出する施設を持つ集客力と、伝統ある常滑焼の文化を基軸とした産業観光との融合による相乗効果が、大いに期待される。ある。本市の産業観光を発展させていくためには、住民や来訪者の意識変化などに柔軟に対応した上で、伝統ある常滑焼の文化に関する情報発信を続けていくことが肝要である。今後も、観光立市を目指し、一層の注力をしていく。

# 交通要衝化と市民力向上で 発展飛躍する「近畿のへそのまち」

## 待ちに待った 新名神高速道路の凍結解除

橋本昭男・城陽市長は今年1月1日発行の「広報じょうよう」に「発展飛躍の年」というタイトルの巻頭言を掲載し、読者である市民に向け、今年以降の積極的なまちづくりへの抱負を述べた。

城陽市は昨年、市制施行40周年の節目の年を迎えた。従って今年以降の積極的なまちづくりへの抱負は、次の節目である50周年に向けた新たな第一歩という意味も含まれるだろう。これには、城陽市の「発展飛躍」として不可欠という市民の強い共通認識がありながら、平成15年以来、工事が凍結されていた新名神高速道路「大津〜城陽間（25・1km）」が、「高槻〜八幡間」（10・7km）とともに昨年4月に凍結解除。平成35年度の供用開始を目指し工事が進められることになった。同時に平成

28年度中に供用開始予定の「城陽〜八幡間」も一昨年12月に着工。こうした動きによってもたらされるべき成果を祈念しての「発展飛躍」の文言なのだ。

「新名神高速道路は構想が昭和62年に持ち上がった当初、第二名神自動車道と呼ばれていました。そして平成3年に亀山西JCT〜城陽JCT/IC間の整備計画ができ、平成8年には城陽JCT/IC〜高槻第一JCT/IC間の整備計画ができ、平成10年にはいったん城陽〜八幡間の事業が着手されているのです。新名神高速道路の構想が第二名神自動車道として打ち出された後は、それを軸にしたまちづくり計画も立案してきましたが、それが一転、凍結ということになったわけです。私は市の職員時代、都市整備部長としてまさに新名神高速道路を軸に推進する都市整備の担当をしておりました。それだけに昨年の凍結解除には、非常に感慨深いものがありました」（橋本市長）



はしもとあきお  
橋本昭男  
城陽市長

新名神高速道路は東京・名古屋・大阪の日本3大都市を1本の路線で結ぶことによる「首都圏・東海地方と京阪神間の短絡化」や、名神高速道路随一の豪雪地帯である大垣〜米原間の冬季回避などの目的の下に計画された構想だった。もともと交通の要衝として知られる城陽市域には、JR・私鉄の駅が6つあり、国道24号、307号、京奈和自動車道などの幹線

道路も四通八達。周辺地域を通る国道1号、京滋バイパス、第二京阪道路などの幹線道路とも連結している。そこに東京・名古屋・大阪と直結する新名神高速道路が開通すれば、さらなるまちの活性化に大きく寄与することになるはずだった。

ところが、平成15年、新名神高速道路の計画が凍結となる。

「京滋バイパスや第二京阪道路などと新名神高速道路が、区間的に並行・重複する形に

なるため、交通需要が低くなることが予測され、採算性が認められないというのが理由でした」（橋本市長）

しかし、凍結されていた間に事情が次第に変わっていった。最大の要因は平成22年、城陽市の周辺を走る京滋バイパスと大阪方面を結ぶ第二京阪道路がつながり、交通量が飛躍的に増加したことにある。その結果、従来の名神高速道路と京滋バイパスが合流する瀬田東JCT付近の交通渋滞が常態化した。連鎖的に京滋バイパスにも影響が及び、特に宇治トンネル付近で渋滞が慢性化するに至った。近畿〜中部を行き来する車両が当該地点に集中したのだ。

城陽JCT/ICを含む区間の新名神高速道路の工事凍結が解除された最大の意図も、

それらの激増した車両を名神・新名神に分散させることにあるとされる。さらに今後予測される大震災などの影響で、近畿〜中部を結ぶ名神高速道路が寸断された場合の備えとして、新名神高速道路の重要性は大きくなること必至との意見が関係各方面で高まったことも、凍結解除の要因の一つとされる。

## 行財政改革を進めながら耐えた日々

一方、城陽市にとっての新名神高速道路の開通がもたらす最大のポイントは、新市街地の形成による企業誘致と雇用の増大、それに伴う税収増など多岐にわたる。その主舞台は新名神・城陽JCT/IC北側に隣接し、国道24号沿いに広がる久世荒内・寺田塚本地区



盛大に挙行された市制施行40周年記念式典(文化パルク城陽)



城陽市の金銀糸の生産量は全国約50%のシェアを誇る



近畿の名勝と謳われた青谷梅林は城陽市の誇り



Jリーグ京都サンガF.C.の練習場、サンガタウン城陽

(約20ha)での工業・流通用地の土地区画整理事業整備および、城陽IC/JCT/JCT宇治田原IC間の新名神高速道路沿いに広がる「山砂利採取跡地(約420ha)」の整備・利用計画だ。

「新名神高速道路の利点を最大限に生かして、私たちは城陽JCT/ICの隣接地へ工業流通ゾーンとして新しい生産拠点の整備を進めています。京都府下でも極端に法人市民税収入の少ない城陽市にとって、市民の雇用の場の確保・創出とともに、法人市民税等の増収による財政基盤の強化は、市民福祉の向上など、本市の活性化を図る上で、これは悲願ともいっていい計画なのです(橋本市長)」。城陽市には「五里五里の里」という愛称があ

「陸地整備計画」を策定しており、この度の新名神高速道路の全線事業化により、その具体化に向けて、より拍車がかかるものと期待される。

橋本市長は市の都市整備部長の職にあるときに新名神高速道路の担当責任者となり、その後市長に就任してから計画凍結の憂き目に遭った。いつか新名神高速道路が開通する日を心待ちにしつつ、不況下で減る一方の税収をカバーするために、現業職を中心とする職員数の削減を実施しなければいけない辛い日々が続いた。

その結果、大型ごみ以外のすべてのごみ収集の委託化、小中学校向け給食センターの移転および調理・運搬業務の委託化、保育園・幼稚園の統廃合など数々の合理化が実現した。将来の都市計画の軸として期待された新名神高速道路の先行きが不透明な中で、厳しい行財政改革を推進しなければならなかったのだ。

新名神高速道路の本格的な建設はこれからで、行財政改革にも終わりはない。しかし、これまでの経緯を思えば、橋本市長が新名神高速道路の凍結解除を聞いて「感慨無量」となった気持ちは、行政関係者であれば誰しも、痛いほどに理解されるのではないだろうか。

### 城陽市の新名物・自分おこし事業

新名神高速道路開通を前提とする都市計

る。京都からも奈良からも五里の位置にあることからそう呼ばれるようになったわけだが、その地理的要因から交通の利便性がよく、交通の要衝として栄えてきた。

既に周辺では、京滋バイパス、第二京阪道路、京奈和自動車道などが整備され、これに近接する市として、阪神方面、名古屋方面、京都北部方面、奈良方面などへのアクセスに至便は好条件にある。

さらに、新名神高速道路が全通すれば、利便性は飛躍的に向上し、名古屋・東京方面にも直結することとなる。企業の生産・物流の拠点を設けるにはまさに「近畿のへそ」として最適の地といえる。

また、城陽市には、昭和30年代から40年代に掛けて、近畿圏の高度経済成長時代を裏から支える役割を果たしてきた経緯がある。近畿圏で大量に建てられたビルディングや道路の建設に不可欠なコンクリート骨材用の砂利採取の好適地として、昭和35年以前は城陽地域の木津川の川砂利が大量に採取されていた。同35年以降は代わって、市域東部の丘陵地帯で山砂利の採取が行われるようになった。

木津川の川砂利採取は、木津川の川床をかなり低下させ、農業用水に支障をきたすようになり、昭和35年に採取禁止となった。そして山砂利採取は、昭和36年頃から現在に至るまで行われ、その面積は約420ha。自然環境や景観が破壊されただけでなく、土砂運搬車両による騒音、振動、埃などにより、市民

画・まちづくり計画は近未来に向けての話だ。またハード整備の範疇(はんごう)に入る話題だが、城陽市では3年前から、全国的にも非常にユニークなソフト事業が始まっている。ジャンルで分ければ、地域の人材育成にまつわる事業といえる。その名称は「城陽自分おこし事業」だ。各地で実施されている地域活性化施策は、地区協議会による地域の課題克服のための事業展開から「ゆるキャラ」の創設による知名度アップ作戦などに至るまで多種多彩だ。それらは「地域おこし」という言葉でくくられることもあるが、「自分おこし」というのはあまり聞いたことがない。

「市民の皆さんにもっともっと元気を出していただけて、しかも、お金があまり掛からず、喜んでいただけるようなユニークなソフト事業があればぜひ実施したい」と日々考えていた橋本市長は、ある日、城陽市出身の作家・依越山さん(数年前までは越前屋依太の芸名でテレビ・ラジオなどを舞台に活躍。現在は書家、大学准教授など多彩な活動で知られる)の表敬訪問を受け、城陽市のこれからを腹藏なく語り合った。

城陽自分おこし事業の構想は、それを契機に生まれた。自分おこしとは文字通り、市民が自分を活性化するための目標を立てて宣言してもらい、行政はその実現を「お勧め」し、後押しをする、啓発キャンペーンの一種といえる。同事業を管轄する市民活動支援課自分おこし推進係が掲げる事例を借りて説明する



新名神高速道路の建設現場(遺跡調査)

の生活環境にさまざまな悪影響をもたらしてきた。

「山砂利採取跡地においては、城陽山砂利採取地整備公社が主体となって修復整備事業を行い、自然環境や生活環境の再生・保全・創造に努めております。この度、新名神高速道路が全通に向け動き始めましたので、今後は現行の第3次総合計画に基づき、都市計画道路などの都市基盤の充実とともに緑濃い良好な住空間の創出を図り、にぎわいのある都市空間の形成を実現していきたいと考えております(橋本市長)」

城陽市では、平成19年に山砂利採取跡地における基盤整備や土地利用に向けて「東部丘

と、次のようになる。

例えば40代の主婦が「家族にこれまでよりおいしい料理を食べさせ、喜んでもらいたい」と思ったら、自分おこし宣言をしてみよう。主婦はそのためにはどうしたらいいか考え、例えば図書館で料理本を借りたり、コミュニティセンターの料理教室に行ったり、さまざまに行動する。ついには地域の農家に野菜を直接買いに行くなどして、家族のために懸命に料理を作る。お母さんのそうした努力が家族の共感と喜びを得て、家庭には笑顔や会話の絶えない日々が続く。家族の喜ぶ顔を見て始めて始めた主婦の行動は、実現されたことで本人の自信にもなる。そして行動を起こした



久世神社の本殿は国指定重要文化財



市民のアイデアで始まった「光のページェント」(12月、総合運動公園)は20万人もの観光客を集める

市制がスタートした昭和47年度の時点で約4万4000人だった城陽市の人口は、京都・奈良・大阪の通勤圏としての交通至便さなどが要因となり、ピーク時の平成7年度には約8万5000人にまで急増した。その後、少しずつ減少して現在は約7万9000人と

### 市民に芽生える 新たな郷土づくりへの思い



書家・依越山さんによる墨痕鮮やかな「自分おこし」の書(文化パルク城陽)と「自分おこし発表会」

なっているが、市制施行時の倍近くに増えていることには変わりない。そして今、通勤圏としての便利さに引かれて城陽市に移り住んだ人たちが定年退職し、続々と「昼間人口」の仲間入りをしている。自分おこしを実施する人々は老若男女を問わないが、主力はそうした中高年および高齢者世代だ。これはベッドタウンとして戦後、急激に人口を増やしたまちに共通する現象といえるが、地域にもととの根を持たずに長年暮らしてきた住民が定年後に昼間人口の仲間入りをする、新たな郷土愛を模索し、行動を開始する傾向がある。自分おこし事業はそういう意味で、地域愛に目覚めた人々の発掘作業であり、「地域の新たなネットワークづくりに資する人材の育成事業」(橋本市長)でもあるといえる。

城陽市では既に先駆的な事例として、平成14年に立ち上げられた「市民参加型の観光協会」の存在がある。行政主導ではなく、市民ボランティアのアイデアを生かした観光振興を進め、その成果の一つである「光のページェント」(毎年12月開催のイルミネーションイベント)は、今では約3週間の会期中に20万人もの観光客を集める大イベントに成長。準備やイルミネーション製作にも多くの市民が参加している。さらに、観光協会の活動は、市民ボランティアガイドの養成、各地へ出向いての観光研修事業など、多彩な活動をしている。このように、地域愛を基盤に自発的な事

業が進められている。

主婦や家族が幸福感に包まれることで、そんな生活の基盤である地域がますます好きになり、地域への関心も深まっていく。――。 「この『城陽自分おこし事業』を議会で説明したときは、これまでに例のない取り組みだけに、様々な意見が飛び交いました。一言では説明しにくい。効果も明快ではない。そんな事業なので、確かにちょっと分かりにくいかもしれませんが、でも私には、市民の真の底力や地域愛というのは、市民一人一人の自己実現の経験を通して醸成されるのではないかなという持論があります。そういう意味でこの事業は、どこにもない面白い企画だと思うのです」(橋本市長)

同事業が開始されたのは平成22年度。依越山さんの協力の下に、これまで街頭でのキャンペーンや「ジブンオコシ新聞」の定期発行、市民の自分おこし発表会、勉強会、ワークショップ開催などを通じて徐々に市民に浸透しつつある。個人的な趣味の域にとどまるテーマも少なくないが、地域愛をテーマにした紙芝居の制作・発表をする人、東日本大震災の被災地復興活動を通して「自分おこし」を図る人、子どもたちの遊び場づくりに奔走する人、子どもたちの見守り活動を自主的に始めた人など、市民個々による「自分おこし」の方法は実に多彩だ。そうした人たちに共通するキーワードは地域をよりよくしたいという「地域愛」である。



JR城陽駅前「ショップ五里五里の里」には城陽市の特産品販売所とともに観光協会も併設

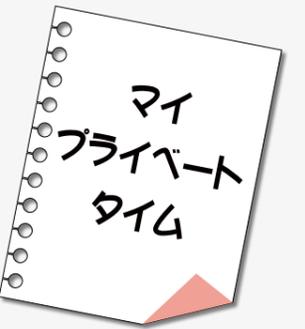
市制41年目の今年、城陽市の悲願だった新名神高速道路を軸とする都市整備計画がいよいよ本格的にスタートする。しかし空白期間が長かった分、ベッドタウンとして急成長してきた城陽市に新たな故郷としての愛着を持つ、数多くの市民の熟成もその間に得られたといえる。それだけに城陽市における新たな都市整備計画は、かつて各地でよく見られたような一律的かつ無機的な開発でなく、市民の幸福と地域の成長への願いが無理なく織り込まれた、花も実もあるまちづくりに結実するのではないだろうか。

(取材・文 遠藤 隆)

て、やがてイベントと一緒に参加する人や、地域の人々などの中から同じ志向の活動を始める人の環ができていけば、今度はそれを地域ぐるみの活性化事業にしていきたい」と語る。そうした地域愛に根差した自然発生的なサークルがまち中に広まれば、例えば地区協議会などの組織立った活動とはまた違う視点からの地域振興の芽が生まれてくるかもしれない。



京都・奈良の間をゆるやかに続く山背古道



# 農家生まれの農家育ちを生かし ～メダカやトキの復活をまちづくりに生かす

おおくぼ としお  
おやま 小山市長(栃木県) 大久保寿夫  
Toshio Okubo

## 開運のまち～小山

小山市は、栃木県の玄関口に位置し、東京駅から60km、新幹線で40分足らずの国道・鉄道と共に交差する交通の要衝にある、人口16・5万人の県下第2位の都市です。一方、国指定史跡が7カ所もある古い歴史も持つっており、特に、徳川幕府300年の栄光の道筋を付けたといわれる天下分け目の軍議「小山評定」の開かれた「開運のまち」であります。

## 田んぼの学校づくりから ラムサール条約湿地登録へ

私は、農家生まれの農家育ち。小さな頃からメダカやドジョウ・牛や豚を友として、子どもにとっては「キツイ」田植えなども強いられる環境で育ち、農業の労働を楽にしたいとの願いから農林省(現在の農林水産省)に就職しました。そして、北は北海道から南は九州までの転勤生活



天下分け目の軍議が行われた小山評定跡

の中で、メダカをはじめドジョウなどが消えつつあるのに危機感を持ち、その復活をライフワークにしています。

メダカやドジョウとの触れ合いは、子どもに生き物の命の大きさ、貴さ、そして生き物への慈しみの心を知らず知らずのうちに学ばせます。そんな生き物の住める環境を取り戻そうとの思いで「メダカの学校」を、体験や労働を通じて心豊かで元気のよい子どもを育てたいとの思いで「田んぼの学校」づくりを始めました。「人は、いのちづくりにいそしんでいる時が一番輝いています」。

「田んぼ」はまさに、「遊び」と「学び」の宝庫です。「田んぼの学校」は、平成19年には、市内全域64カ所にわたる「農地・水・管理保全事業」へと発展し、平成24年には、「渡良瀬遊水地」のラムサール条約湿地登録となって結実しました。そして、今年、条約登録の目的である「賢明な活用」として「エコミュージアム化」「トキ・コウノトリの野生復帰」「環境にやさしい農業推進」をスタートさせるべく意気込んでいます。

## 中国との関わり トキ・コウノトリの野生復帰

月から見える地球最大の構築物「長城」。その長城から北東に3000km余り、ロシアとの国境を接する黒龍江省に、面積

残念ながら日中トキのペアからは、ひなは誕生しませんでした。1999年中国から贈られたつがいから4月、人工ふ化でひなが初めて誕生し、2008年に始められた放鳥で、昨年4月、自然界で36年ぶりにひなが誕生しましたことは、大きな喜びでした。いつしかトキが、わが小山市に飛んで来て欲しいとラムサール渡良瀬遊水地で現在、「トキの野生復帰」のための条件づくりに努めています。

## 小山ブランドの創生

私は農家生まれの農家育ちを生かし、市長就任後直ちに「小山ブランド」の創生に取りかかりました。市には「水と緑と大



渡良瀬遊水地から富士山を望む

地」の豊かな自然と人々の高い技術によって生み出された素晴らしい農畜産品が数多くあります。かつて全国一だったビール麦、現在、全国一のはとむぎをはじめ県下一の小山和牛、米パン、地酒、お菓子類などの農畜産品、加工品。2010年世界のユネスコ無形文化遺産に登録された世界唯一の手づくりの絹織物である「本場結城紬」、間々田ひも、下野人形などの工芸品。どれも全国に誇れる「小山ブランド」です。この「小山ブランド」の創生・発信拠点が2006年設置した「道の駅思川」です。オープン以来、「日本一のロケーション」「日本一の開放的で明るい姉妹都市ケアンズ風の建物」「日本一の小山ブランド」「日本一のサービス」「日本一の売上」を目指して頑張っています。

## スポーツのまち小山 ～褒めて育てる

スポーツは見るのもするのも好きですが、特に、「野球」には子どもの頃から親しんでいます。当市の野球は、古くは江川卓(元巨人)、広澤克実(元ヤクルト)を輩出。現役では、成瀬善久(ロッテ)をはじめ飯原晋士(ヤクルト)、高谷裕亮(ソフトバンク)などの地元白鷗大学出身選手が活躍中。白鷗大学からは、この8年間で7名もプロ入りしています。栗山英樹白鷗大学元教授は、昨年監督就任1年目



田んぼの学校の田植え

約1000万haの湿地「三江平原」があります。中国政府は1979年、この湿地を大穀倉地帯とすべく、モデル地区の開発を日本政府に要請してきました。この日中国交回復後初の協力である「三江平原農業開発計画」に農水大臣視察が計画され、その訪中団員として選ばれた私は、その後「中国」と深く関わることとなりました。三江平原農業総合試験場計画が開発された1986年、私は農水省から外務省に出向し、北京の日本国大使館一等書記官として赴任しました。

中国大使館での仕事は、多岐にわたりましたが、中でも、日本で絶滅寸前であったトキの伴侶として中国トキの貸与役を務めたことが、強く印象に残っています。



萩野選手と海老沼選手の功績を称える懸垂幕

で、日本ハムをリーグ優勝させる離れ技をやったのけました。私は、小山のスポーツを育てるために、「褒める」ことを心掛けています。「褒めて育てる」。

今やロッテのエースとして活躍している成瀬も飯原、高谷も皆、県・関東・そして全国と活躍するたびに市役所と呼ばれる活躍を褒めました。昨年開かれたロンドンオリンピックでは小山出身の萩野公介君が競泳で、海老沼匡君が柔道で、共に「銅メダル」獲得の快挙を成し遂げてくれました。彼ら2人も小さい頃から活躍を褒め讃えたものでした。これからも小山のスポーツを褒めて育てて強くしていきたいと思っています。



小山市長 大久保寿夫

第36回

## コンプライアンス② コンプライアンスの環境整備について

市町村アカデミー客員教授 大塚康男



### コンプライアンスの環境整備

#### (1) 外的要因がポイント

職員が汚職や公金着服などの事件を起こすと、そもそも人間は本来、性善か性悪かのいずれであるかの議論がありますが、性善説を前提に考えれば、職員は本来的には悪いことではないわけですから、あえてコンプライアンスなどに取り組み必要はないものとなります。これに対して、性悪説を前提にしますと職員が悪いことをしないように組織的な取り組みが必要となります。しかし、職員の行動はそのいずれかによって決められるものではなく、外的要因によっていかようにでも変化するものなのです。人間はその置かれた環境に影響を受けやすい存在ですから、コンプライアンス環境が整備されているかによって、職員に健全な業務をさせることにもなれば、不祥事に走らせることにもなり得るわけですから。その基本が前記した士気の高い職場であるか否かなのです。

#### (2) 管理者の意識

職場にはさまざまな誘惑があることも事実です。入札や許認可に係る業者からの誘いや不特定多数からの災害見舞金の取り扱いなど、放置すれば不正が生じやすい状況があります。職員の善意だけに委ねてもコンプライアンス環境は整備できません。それにもかかわらず、職員が不祥事などを起こしたときの管理者の記者会見において「かれは勤務態度もまじめで、今回のような不祥事を起こすとは全く考えられないことです」との本人を全面的に信用していたのに裏切られたとの弁解に終始する記者会見をするようでは、組織を維持する立場の者としては、怠慢の誇りをまぬがれず、管理者としての素養が欠けているといわざるを得ません。

#### (3) 情報入手の必然性

併せて、かつてのように情報が特定の者にしか流れず、多くの人が知らずとも知ることができなかったときには「知らなかった」という弁解が許された時代もありました。し

ンプライアンスの意識が完全に欠落しており、安全教育や規定された安全管理措置がほとんど無視されていました。さらに、バケツで危険なウラン溶液を扱うという大きな過ちを犯し、それによって2人の死者と数百人の被爆者を出し、会社とその安全管理の責任者6名が刑事裁判にかけられました。

### コンプライアンスを徹底するための方策

#### (1) 事前予防

事前予防のための方策としては、①組織としての基本方針の確立、②基本方針を具体化するためのルール作り、③宣言、④研修、⑤適正な人事異動などが実践的に行われなくてはなりません。しかし、その基本方針を確立し、ルール作りを実践するといっても自治体には関係法令が膨大にあり、これを完全にフォローすることは不可能です。そこで、物理的、時間的制約の中で、できるだけ効率的、効果的に作業を進めるためには、身近な問題であり、実務的に重要な分野からはじめていくことになります。そのことは、日本でコンプライアンスが導入されるようになってきた経緯からもうかがい知ることができそうです。独占禁止法、セクハラ、個人情報保護法などであり、一般職員からすると何がセクハラなのか、何が個人情報なのかを職員にしっかりと理解させないと、その遵守は徹底できないこととなります。

セクハラを例にとった場合、セクハラをどう予防し、また問題が起きた場合にどう対応するかといったプログラムにそって、①分かりやすくセクハラとは何かをルールとして定義付ける、②定義に基づいてセクハラの内容を明らかにする、③首長によるセクハラ防止を毅然とした態度で市民、議会、マスコミなどに表明する、④問題が生じた場合に備えて相談窓口を開設する、⑤セクハラ事件が起きた場合には徹底的な事実説明と当事者の納得のいく解決を図る、⑥明白なセクハラがあれば断固とした処分を行い、うやむやな処理はしない、⑦セクハラが発生した場合には、なぜ問題が生じたかの原因を究明し、職場環境や人事の見直しに役立てる、⑧セクハラに関する問題意識を風化させないためにも、定期的な研修や教育を実施するなどセクハラプログラムとして考えられます。

#### (2) 事後のチェック

事後のチェックシステムの方策としては、問題が発生したときには正確な事実の把握が必要となります。また苦情処理においても客観的な事実を把握することが大前提になります。事実の把握は問題が発生したら直ちに実施しなくてはなりません。期日が過ぎれば過ぎるほど事実の把握は困難になります。ましてや実際にトラブルなどが発生すると、担当者に臭い物にふたをしようとする感覚が少しでもあれば、原因究明も曖昧になり、同じような過ちを再び繰り返す温床になってしまいます。

かし、高度情報化社会を迎え、あらゆる情報が大量に提供されている今日においては、積極的に動けばかなりの情報が入手できる時代となっています。例えば、A職場で公金の管理がずさんで公金の亡失や紛失が見受けられるという情報が入手された場合は、速やかに事実を確認する作業を行わなければならない、問題が生じていないのであるからといって放置することは許されませんし、これを放置すれば公金などの適正管理を怠ったとして住民訴訟などにまで及んでいきます。

#### (4) 教育・研修の必要性

悪いことはしないようにとする教育だけでは、コンプライアンスは不十分です。コンプライアンスを組織に定着させるためには、職員一人ひとりが正しい問題意識を持つことが大切であり、そのための意識教育が重要なのです。そのコンプライアンスが欠落した事例を紹介しておきます。平成11年9月に起きた茨城県東海村の核燃料加工会社JCOの臨界事故において、事故を起こした会社では、コ

客観的な事実を把握するためには、証拠を確保しておくことは当然ですが、それ以上に重要なことは日常の業務記録などが正確かつ適正に作成され、管理・保存されていれば、いざ問題が起きたときでもクレームが指摘された時点での記録と照合することにより、クレーマーなどの指摘が正しいのが判断することができそうです。そしてこれが証拠となります。人の記憶だけでは事実の確かめようがありません。

いづれにしてもコンプライアンスの問題は一過性で処理できるものではありません。組織が継続する限り、組織とともに歩んでいかなくてはならないのです。このことを組織の責任者である首長をはじめ幹部職員は忘れてはなりません。

#### 筆者プロフィール

#### 大塚康男 (おつかやすお)

1946年東京生まれ。1970年日本大学法学部卒業。1973年市川市職員、同総務部法規係長、企画部企画課長補佐、環境部指導調整室長、総務部法務室長、総務部次長、議会事務局次長、教育次長。2007年から市町村職員中央研修所(市町村アカデミー)客員教授(「行政訴訟の実務」「住民監査請求」「議会事務」「危機管理」「債権管理」)。その他、自治大学校、全国市町村国際文化研修所、自治体が行う職員研修の講師。危機管理関連の著書に『実務住民訴訟』『議会人が知っておきたい危機管理術』『自治体職員が知っておきたい債権管理術』『新版・自治体職員が知っておきたい危機管理術』などがある。

# 「生涯を安心して過ごせる地域 完結型市政」の実現を目指して

はじめに

南魚沼市は、新潟県の南部に位置し、東は越後三山や巻機山などの2000m級の高峰、西は魚沼丘陵のなだらかな峰に囲まれ、中央を清流魚野川が流れる自然豊かなところでは、

古くから越後における関東からの玄関口として、ユネスコ無形文化遺産に登録された「越後上布」などの織物の産地として栄えてきました。現在、その面影は旧三國街道塩沢宿の姿を再現した「牧之通り」に見ることができます。近年は関越自動車道と上越新幹線という交通の大動脈が通り、交通・物流の中継地として大きな役割を担っています。

平成16年に大和町と六日町が合併して南魚沼市が誕生し、翌年、

塩沢町が加わり、現在の市の姿になりました。

全国有数の豪雪地帯であり、夏は盆地特有の暑苦しさとという厳しい自然の中で、逆にこの環境を生かし、工夫と努力を重ねながら、南魚沼産コシヒカリやスキー観光などの市の基幹産業を育ててきました。

## 先人たちから引き継ぐ 質実剛健の気質

NHK大河ドラマ「天地人」の主人公である直江兼続公とその主君上杉景勝公はこの地で誕生しました。兼続公が重んじた「義と愛」の精神は、今もこの地に受け継がれています。また、江戸時代に40年の歳月を掛けて雪国越後の風俗を綴った「北越雪譜」の著者である鈴木木牧之や、明治時代に私財を投げ打って上越線敷設に尽力した岡村

貢翁も本市の生まれです。

こうした先人の偉業に見られるように、実直で、義に厚く、粘り強く道を切り開いていくのが、南魚沼人の気質でもあります。

## コシヒカリだけでは 南魚沼産の育成に意欲

魚沼産コシヒカリの知名度は抜群で、その中でも南魚沼産は特においしいとの評価をいただいています。しかし、近年のコメ離れや低価格志向などで、本市のコシヒカリにおいても状況は厳しいものがあります。南魚沼産としてのさらなるブランド強化を図るとともに、コシヒカリ以外の農作物、特産品の育成にも力を入れることで将来への展望を見いだしていきたいと思っています。

平成24年にオープンした道の駅



春を迎える三國街道塩沢宿牧之通り

## 基幹病院誕生を機に新たな 産業の創設を目指す

これまで、本市では工業団地を

ストリア共和国セルデン町、ニュージーランド国アシユバートンの各姉妹都市との交流などを通じて、海外に目を向け羽ばたいていく人材育成にも力を入れています。

## むすびに

合併10年を迎えようとする本市は、ようやく市として基礎固めを

終えて、さらなる発展に向けての希望あるまちづくりを進めているところでは、

市誕生時に掲げた目標である「この地に生を受け、子育てから教育、雇用、老後まで、生涯を安心して過ごせる地域完結型市政」の実現を目指してこれからも邁進してまいります。



平成27年開院予定の魚沼基幹病院(仮称)完成予想図

造成し、製造業を中心に企業誘致を進めてきましたが、近年の経済情勢の中で、今までと同じ手法、方向性では苦戦しているのが実情です。これからは知的産業の集積に力を入れる方向で戦略を練っており、その一つが「メディカルタウン構想」です。

魚沼地域に待ち望まれていた救命救急医療や高度医療を担う基幹病院が、平成27年の開院を目指して、本市に建設が進められていますが、この機会を生かし、新潟県と協働で健康関連産業を誘致していくと取り組んでいます。

本市には、医療系の北里大学保健衛生専門学校もあり、今後はこうした病院や教育機関と連携できる企業や研究所を誘致していきたいと考えています。

## スキーから自然を生かした 夏季観光へ、そして国際交流も

本市は日本有数の豪雪地帯で、

## プロフィール

- ◆ 面積 584.82km<sup>2</sup>
- ◆ 人口 6万858人
- ◆ 世帯数 1万9705世帯

〔将来都市像〕「自然・人・産業の和で築く安心のまち」

〔まちの特徴〕米うまき、「天地人」ゆかりのまちであり、大自然の宝庫、スキーリゾートとしても有名

〔市町村合併〕平成16年11月1日、大和町、六日町が合併して南魚沼市誕生。平成17年10月1日、塩沢町を編入合併

〔特産品〕コシヒカリ、八色スイカ、



南魚沼市長  
井口一郎



八色しいたけ、日本酒(八海山、鶴齢、高千代、越後ワイン、織物(越後上布))  
〔観光〕スキーリゾート(市内10カ所のスキー場)、六日町温泉、坂戸城址、八海山ロープウェイ、雲洞庵、牧之通り(三國街道塩沢宿)  
〔イベント〕南魚沼市兼続公まつり、南魚沼市雪まつり、越後浦佐毘沙門堂裸押合大祭、南魚沼グルメマラソン

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

# 市民との協働の下 「人が輝く水と緑の交流都市」の実現を目指して

はじめに

小美玉市は、平成18年3月27日に2町1村の新設合併により誕生しました。東京都心から北東へ約80km、茨城県のほぼ中央部に位置し、北へ約20kmの距離に県都水戸市、南西へ約20kmの距離に筑波研究学園都市があります。また、南は日本で第2位の面積を誇る霞ヶ浦に接



霞ヶ浦から望む筑波山

しています。

市の西部をJＲ常磐線、国道6号線、常磐自動車道が貫き、こうした交通アクセスの良さから、多くの優良企業の工場が進出しております。南部は霞ヶ浦湖畔に特産のレンコンの蓮田が広がり、そこから筑波山を望む風景は素晴らしく、本市出身の故滝平二郎氏の「きりえ」にも描かれています。また、東部には航空自衛隊百里基地が所在し、平成22年に百里飛行場の民間共用化による茨城空港が開港し、神戸、札幌、沖縄への国内便のほか、上海など国際便も就航し、北関東の空の玄関としての役割を担っております。

## 基礎基盤の整備から新しいまちづくりへ

市制施行後、この春で7周年を

くりに参加しやすい仕組みづくりを整備し、市民活動の芽を育成していくための行政支援を実施してまいります。

地区コミュニティの育成などについては、「自分たちのまちは自分たちで創る」という住民自治の基本理念に基づき、小学校区を単位とする組織整備を推進しております。現在のところ市内12学区のうち7学区に組織が整備され、各地域において交流イベントの開催、防犯活動、環境美化活動など、さまざまな形で事業の展開がなされております。

また、まちづくり活動支援については、地域の課題解決に向け、市民それぞれが役割と責任の下で自主的に取り組む組織活動に対し「まちづくり組織支援事業」を実施しております。

本事業におけるまちづくり組織の認定、活動補助金交付の要件としては、「住民が知恵と汗を出し合って自主的に活動を推進しているかどうか、活動内容がまちづくり計画の内容に沿っているか」など公共的サービスの提供や補完と微として、活動補助金の交付に当

迎えます。この間、市民の皆さまが等しく合併の効果を楽しめるよう、また、一体化の醸成が図られるよう努めてまいりました。その一つが県内初となる自治基本条例の制定です。これは、本市の最高規範であり、「情報共有・参画・協働」の基本原則などを定め、市民によるまちづくりを推進するためのものであります。この条例の制定により、市民の日条例・男女共同参画条例および推進計画・パブリックコメント規則・情報提供の推進に関する指針・まちづくり組織支援制度など、各分野での基本的な条例や計画が整備されました。今後のまちづくりについては、本市の有する特色ある地域資源や人的資源を生かしながら、総合計画の基本構想で示す将来像である「人が輝く水と緑の交流都市」を実現する

たつては、諮問機関としてまちづくり審査会を設け、申請内容を精査し、本会から答申を受けるという体制により交付決定を行っております。

## 結びに

今後大変厳しい財政運営が予想されますが、より一層無駄をなくし、コスト削減に取り組むとともに、常に費用対効果を考えなが

ため、現在策定中の後期基本計画に茨城空港周辺の「空の交流エリア」、JＲ羽鳥駅周辺の「陸の交流エリア」、霞ヶ浦周辺の「水の交流エリア」を中心とした市内の均衡ある整備を計画しております。

## 茨城空港と地域再生の展望

開港3周年を迎えた茨城空港は、首都圏の航空需要の一翼を担い、LCC(ローコストキャリア・格安航空会社)に対応できる空港として「人・モノ・情報」の新たな流れを生み出し、年間約100万人の来



平成22年3月に開港した茨城空港(これまでに延べ280万人が来場)

## プロフィール

- ◆ 面積 145.03km<sup>2</sup>
- ◆ 人口 5万3652人
- ◆ 世帯数 1万9951世帯

〔将来都市像〕人が輝く 水と緑の交流都市

〔まちの特徴〕都心から80kmの通勤圏、南部は霞ヶ浦に面し、平坦な土地を生かした農業が基幹産業のまち

〔市町村合併〕平成18年3月27日、小川町、美野里町、玉里村で新設合併



小美玉市長 島田穰一



〔特産品〕乳製品(生乳)、鶏卵、レンコン、イチゴ、ニラ、ブルーベリー

〔観光〕小美玉市民家園、小美玉市希望ヶ丘(コスモス畑)、トキワ園芸農協花木センター、茨城空港(ターミナルビル)、タカノフーズ納豆博物館

〔イベント〕小美玉さくらフェスティバル、小川素戔神社祇園祭、小美玉市ふるさとふれあいまつり、百里基地航空祭、小美玉発!スターなりきり歌謡ショー、市民の日式典(誕生祭)

※面積は国土地理院「全国道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

## 地区コミュニティの育成とまちづくり組織活動支援

「人・もの・こと・歴史・文化」を改めて見つめ直し、本市の持っている魅力や誇り、宝物を市内外に発信していくものであります。

本市では、小学校区すべてのコミュニティの設立に向け、組織の醸成を図るとともに市民がまちづ

# 「市民が主役 市民が輝く知多市」を 目指して、市民との協働によるまちづくり

## まちづくりの担い手の育成

知多市では、「市民が主役 市民が輝く知多市」を目指して、市民との協働によるまちづくり、地域づくりを進めています。「大人の学校」(まちづくり人材育成事業)は、団塊世代の方の大量退職が始まる平成19年に開校しました。これまで



まちづくり人材育成事業「大人の学校」

の社会で培われた知識・経験・技術を地域で生かしながら、仲間たちと自分たちの地域にお返し、貢献をすることが、いかに個人の人生を充実させるかを考える大切な気付きの場であり、「まちづくりの担い手」を輩出する「大人の学校」は、市内外から大変注目度の高い事業です。事業は知多市市民活動センターで活動する団体が連携して行っており、市民が市民を育てるユニークな人材育成プログラムとなっています。

平成24年度からはカリキュラムを大幅に見直し、「地域貢献実践コース」など様々な目的別のコースを創設しました。学習者が自分にあったコースを選択することで地域の人材が様々なまちづくりの分野で活躍する活動へと結びつけています。

## 人口約8万6000人のまちで 現役プロ野球選手が4人

4人は、平成23年度プロ野球セントラルリーグ最優秀選手賞などを受賞し、市民栄誉賞授賞第1号となった地元中日ドラゴンズの浅尾拓也投手をはじめ、セ・パ両リーグで本塁打王を獲得した山崎武司内野手、平成24年ドラフト1位指名で中日ドラゴンズに入団した慶應義塾大学の福谷浩司投手、読売ジャイアンツの小山雄輝投手です。OBでは、昭和62年ドラフト1位指名で阪急ブレーブスに入団し、プロ生活で通算56勝を挙げた、現阪神タイガースの伊藤敦規投手、二宮ゴーチがいます。現在、市内の小学生軟式野球チームは14あり、高校や大学、プロ野球で活躍する先輩が、後輩の野球少年たち

の目標になっている「プラスの連鎖」が、本市の野球レベルを引き上げています。今後も、本市のスポーツ振興の目的の一つである「夢と感動・競技力の向上」につながるような選手が現れることを楽しみにしています。

## 自治体間競争力の強化に向けて

本市臨海部には、エネルギー関連産業が、また大興寺工業団地には、航空機関連、自動車、工作機械などの産業が集積しています。本市のさらなる発展のため、浦浜地区工業用地等開発事業は、「工業振



企業誘致促進プロジェクト「浦浜工業団地」

興し雇用の場の確保し定住・交流人口の増加し市内消費の拡大し産業振興」という好循環を生み出し、これによってもたらされる税収の拡大をもって、市民サービスの向上へとつなげることを目的に、平成22年度に着手し、平成24年4月に竣工を迎えました。

迷などにより市税収入が毎年度減少し、行政経営は大変厳しい状況にあります。そのため、収支不足を早期に解消し、真に必要な市民サービスを継続できる行財政構造への転換を図るために、平成24年11月に、平成25年度から27年度までの3年間の目標を明確に掲げた「知多市行財政改革プラン2013」を策定しました。

このプランでは、改革のテーマを「歳入身の丈に合った住民サービスの最適化」とし、(1)事務事業の見直し、(2)施設運営の見直し、(3)人件費の削減、(4)受益者負担の適正化と収入確保の工夫という4つの

## プロフィール

- ◆ 面積 45・76 km<sup>2</sup>
- ◆ 人口 8万6055人
- ◆ 世帯数 3万3528世帯

〔将来都市像〕笑顔つながる いきいき 緑園都市

〔まちの特徴〕西は伊勢湾、東は丘陵地、地形は平均してなだらかな平坦地で、四季を通じて温暖で住みやすいまち

〔特産品〕ペコロス、ふぎ、佐布里梅酒、



知多市長 加藤 功



知多蒸溜所特製グレーンウイスキー  
〔観光〕愛知県下の佐布里池梅林、岡田の街並み、新舞子マリナーパーク、ブルーサンビーチ  
〔イベント〕尾張万歳、大興寺の開運福だるま大祭、佐布里池梅まつり、岡田春まつり、ビーチライフin新舞子、朝倉の梯子獅子

重点項目を定め、合計159件の改革取り組み項目と一般会計における目標効果額約15億1800万円を規定しています。行財政改革は行政に課せられた永遠の課題であり、現在の事務事業や受益と負担の関係を見直し、時代の変化に対応した制度や仕組みへと転換を図り、真に必要な事務事業の選択と集中を遂行し、行財政改革を固い決意を持って進めていきます。

## 結びに

本市が持続的発展を維持していくためには、人的資源や人々の知恵など地域経営の礎となる「地域力」を育み生かすことで、本市の価値や魅力を高める必要があります。私は、市民の皆さんのご理解とご協力のもと、「市民が主役 市民が輝く知多市」の実現に向けて、今後もしっかりとした市政の舵取りを行ってまいります。

## 地域完結型医療体制の確立

本市および隣接する東海市で構成する「西知多医療厚生組合」では、地域完結型医療体制の中核病院としての役割を果たせる規模と機能、交通の利便性を確保した新病院を平成25年度から建設し、平成27年度の開院に向け、準備を進めています。新病院は、(1)充実した救急医療、(2)質の高い医療、(3)地域医療と医療連携の強化、(4)健全で安定した経営などのできる病院を目指しています。

## 知多市行財政改革プラン 2013の策定

本市では、近年長引く景気の低



愛知県下一の「佐布里池梅林」

※面積は国土地理院「全国都府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

# わが

## 豊かな自然がはぐくむ食とおもてなしによるまちづくり

### 南九州市の紹介

鹿児島県薩摩半島の南に位置する南九州市は、平成19年12月に揖宿郡額娃町、川辺郡知覧町、川辺町の3町が合併し、南九州市として歩み始めました。昨年12月には市制施行5周年を祝ったところ です。

本市は、農業が基幹産業で、日本一の生産量を誇るお茶やさつまいもをはじめ、豊かな自然と温暖な気候に支えられ、鹿児島黒牛や黒豚、品質の高いさまざまな農畜産物が生産されています。

観光地としては、知覧武家屋敷群や東シナ海を望む海岸線など、さまざまな景勝地や旧3町から引き継がれているたくさんのお茶施設があり、多くの観光客にお越しいただいています。

### 日本最大の茶産地 信頼される産地づくり

合併により茶園面積は約3400haとなり、日本で最大の茶産地となりました。これまで、全国茶品評会などで産地賞や農林水産大臣賞を受賞するなど、品質面でも高い評価を得ています。

区画整理をされた広い農地を中心に茶園が広がり、大型管理機械による機械化栽培体系や加工の共同化などにより省力化が図られ、後継者も育成されています。

平成20年に茶業関係者の組織である茶業振興会の統合は図られたものの、合併以降も「額娃茶」「知覧茶」「川辺茶」として、旧町ごとに銘柄が分かれているため、知名度や市場価値を高めるためにも銘柄の統一が最も重要であることから、

平成28年を目標に全国的にブランドとして名の通っている「知覧茶」への統合に向け、取り組むこととなりました。

今後、生産、加工技術などの高位平準化をはじめとした課題解決が残されていますが、これまで旧町ごとに市の茶業担当職員を配置していたものを銘柄統一に向けて茶業課として1カ所に統合し、生産、販売、消費拡大などに取り組んでいく計画です。

全国的にお茶離れが進み、消費が低迷する中、日本茶をリードしていく産地として、茶業関係者と一体となって茶業の振興に取り組んでまいります。

### 産直施設 道の駅 「川辺やすらぎの郷」

道の駅「川辺やすらぎの郷」は、



南九州市のキャラクター「お茶むらい」

農畜産物を中心にした直売施設で、特産のお茶コーナー、地元農家が丹誠込めてつくった新鮮野菜や川辺牛、地鶏、地元産の大豆を使った豆腐やみそ、手作りのパン、素材にこだわった惣菜、菓子などをそろえ、併設のレストランでは、手打ちそばなど地元食材を利用した料理を提供しており、市内外からの買い物客でにぎわっています。

### 特攻の史実を 後世に残すために

本市には、太平洋戦争末期、沖

繩戦において、特攻という人類史上類のない作戦で、爆弾搭載の飛行機もろとも敵艦に体当たり攻撃をした陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料を展示した知覧特攻平和会館があります。

ここには、特攻作戦で戦死された隊員の当時の真の姿・遺品・記録などが展示されており、この史実を多くの方に知っていただき、戦争のむなしさ、平和の大切さ、ありがたさ、命の尊さを訴えるとともに、これらを後世に正しく語り継ぎ、恒久の平和を祈念することが私たちの責務と考えています。



広がる茶園と機械化された茶摘み

平和会館には、県内外から多くの来館者が訪れ、小・中・高校生の平和教育の場として広く活用されています。

戦争を体験した方が次第に減少していく中で、特攻隊員が国を思い、家族を思い、出撃しなければならなかった心情を通して、二度と悲惨な戦争を繰り返さないために特攻隊員の貴重な遺品を世界記憶遺産登録に向けて、申請の準備をしているところです。

世界記憶遺産の登録は「世界恒久の平和」に寄与するとともに「特攻」の風化を阻止し、戦死された特攻隊員への深い慰霊および供養になると考えております。

### 交流のまちづくり おもてなしの心

市内には、国の名勝に指定されている知覧武家屋敷群や桜の名所岩屋公園、伊能忠敬が天下の絶景と称賛した番所鼻自然公園など自然豊かな景勝地があり、知覧特攻平和会館の入館者と合わせると年間100万人を超える観光客が訪れています。また、釜の蓋を頭に載せるユニークな参拝方法がメディアで取り上げられたことや口

### プロフィール

- ◆ 面積 357.85km<sup>2</sup>
- ◆ 人口 3万9000人
- ◆ 世帯数 1万7270世帯

〔将来都市像〕自然豊かで創造と活力に満ちくらしといのが輝くこころやすらぐまち

〔まちの特徴〕県都鹿児島市に隣接し風光明媚で農業の盛んなまち

〔市町村合併〕平成19年12月1日、額娃町、知覧町、川辺町による新設合併



南九州市長  
霜出勘平



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

# 昼前の人材に注目

## 後藤新平（六）

イラスト／川名 京

### 人材煩惱

後藤新平の外交戦略については、「単なる帝国主義ではない」と説く先学もおいでだ。が、この稿ではそういうことは一応措く。

後藤は幕末の先覚者が説いた「和魂洋芸（才）」の実行者であつたかもしれない。外国のすぐれた点はほとんど導入した。日本の衛生制度・国鉄（JR）や満鉄の創設・震災後の東京市の徹底的な改造・東京市政調査会（現・公益財団法人後藤・安田記念東

京都市研究所）の設置など枚挙に暇がない。

晩年の後藤は「政治にも倫理が必要だ」と告げ、人材育成に深い関心を持った。後藤の推薦によって東京市長になった永田秀次郎（青嵐）は、後藤について、「後藤さんは人材煩惱だった」という。

満鉄総裁になったときも、学者・民間企業などから、三十歳そこそこの若い人物を招いて思うように仕事をさせたという。後藤はこういう登用方



法について、

「わたしは午後三時ごろの人間は使わない。

「お昼前の人間を使うのだ」といつていた。

これは日本のためにあるいは世界のために活躍して欲しいと願っていたからである。したがってその登用範囲も広く大杉栄から北一輝に及ぶような幅の広さを持っていた。



また、ボーイスカウトに深い関心を持ち、やがて連盟の総長になった。東京市長を辞職したときの慰労金（十万円）を、そっくりボーイスカウトに寄付した。少年たちはそのお礼の意味かどうか、

「ぼくらの好きな総長は、白いお髭に鼻眼鏡 ダンプクつけても杖持って いつも元気でニコニコ」という歌をつくって献じたという。後藤新平は涙ぐんでこの歌をきいたそうだ。

### 生涯、童心で生きる

大政治家だった尾崎行雄が、後藤新平について次のような思い出話をしている。「わたしが東京市長をしていたころ、あるとき官邸に桂太郎総理を訪ねた。先客があるという。だれだときくと、後藤新平さんだという。

やがて後藤が出てきて挨拶し去っていった。しかしわたしが桂さんと話をしはじめ五分も経たないうちにまた秘書官が、「後藤さんがおみえになりました」

という。

桂総理は笑い出した。わたしは、「後藤さんはいま帰ったばかりではありませんか」というと、桂総理は笑って次のような話をした。

・後藤さんは天才的なひらめきで道を歩いていてもすぐなにか思いつく  
・そうになると、いてもたってもいられなくなって、たとえたつたいま別れたばかりの人間のところにもすぐ戻ってくる  
・そして滔々と自分の思いつく話をする  
「こんなことが、一日に三回も四回もある。しかしその一回ぐらいは国家としてもきくべき内容を持っているので、ぼくは後藤くんのそういうクセが楽しみなのだ」といわれた。

尾崎行雄はこの思い出話をしながら、「後藤さんは、死ぬまで子どもの心を持っている。いた魂のきれいな人だった」と語っている。

（この項終り。次回からは「新島襄」の連載となります）